2011 ワタシタチの足跡

3 Mar

11 — 東日本大震災発生

15 — 教職員２名　学生の安否確認のため石巻へ

16 — 学生全員の無事を確認

18 — 手作りの小さな卒業式

4 Apr

12 — 新年度スタート　授業開始

21 — お花見

28 — 新入生入国

30 — 被災地ボランティア活動開始

5 May

26 — サウジアラビア大使館より感謝状授章

6 Jun

8 — フットサル大会

14 — 義援金受取

7 Jul

21 — 校外研修　鳴子温泉

23 — 夏休み（～8/3　新入生補講）

8 Aug

17 — 始業式

9 Sep

9 — 避難訓練

20 — 前期終了（～9/28　新入生補講）

●目次

◇ **ワタシタチの足跡**・・・1

◇ **編集方法について**・・・4

●「私の地震体験」池 玉姫 Chi Yuji・・・6

●「日本人はどんな様子だったか」Husain Alamri・・・8

●「地震の日」Purja Pun Vinod Kumar・・・10

●「希望の光」Gutierrez Sanchez Victor Manuel・・・12

●「(無題)」文 貞現 Moon Junghyun・・・14

◇ **仙台国際日記より vol.1「被害状況」**・・・17

●「(無題)」崔 春香 Cui Chunxiang・・・18

●「日本がんばろう 仙台がんばろう」Lkhagvadorj Ganbayar・・・22

●「(無題)」Bhandari Madan・・・24

●「初めて大地震体験しました」Villamil Lopez Domingo Edgar・・・26

●「私が遭った大地震」李 文学 Li Wenxue・・・28

◇ **仙台国際日記より vol.2「卒業式」**・・・31

●「新しい生活 3月11日」Garbuja Pun Devi・・・32

●「日本頑張ろう、仙台頑張ろう!」魏 峰 Wei Feng・・・34

●「命の試練」陸 余嘉 Lu Yujia・・・35

●「世界のしんぱいな地震」Pun Dilip Khorja・・・36

●「私の東日本大震災に思うこと」王 孝銘 Wang Xiaoming・・・38

◇ **仙台国際日記より vol.3「取材」**・・・44

●「(無題)」Purja Pun Lalit・・・45

●「(無題)」宋 美蘭 Song Meilan・・・46

●「本当に強いじしん」Purja Khem Lal・・・48

●「東日本大震災の感想」梁 慧賢 Leung Waiyin・・・49

●「一つになろう日本」全 善花 Quan Shanhua・・・50

◇ **仙台国際日記より vol.4「支援」**・・・52

●「地震の体験」斉 海軍 Qi Haijun・・・53

●「日本でわすれられないけいけん」Bhattarai Mani Prasad・・・54

●「日本大地震中の私たち」王 雪嬌 Wang Xuejiao・・・56
●「なんで」Shrestha Nabin・・・58
●「私は信じます」鄭 勲 Zheng Xun・・・59

◇ **仙台国際日記より vol.5「花見」**・・・60

●「一生忘れないこと」趙 雪美 Zhao Xuemei・・・61
●「神さまをおもいました　3月 11 日」Pun Del Bahadur・・・62
●「日本頑張ろう　仙台頑張ろう」金 元星 Jin Yuanxing・・・64
●「かならずおぼえる日　3月 11 日」Acharya Pramod Prasad・・66
●「2011 年 3 月 11 日（午後 14 時 40 分ぐらい）」李 玉明 Li Yuming・・・68

◇ **仙台国際日記より vol.6「震災ボランティアその1」**・・・69

●「命の大切さ」玄 雪香 Xuan Xuexiang・・・70
●「一生忘れられない日」鞠 佩倫 Ju Peilun・・・72
●「3・11」元 慧丹 Yuan Huidan・・・74
●「地震」蔡 錦錫 Cai Jinxi・・・76
●「わたしは生きる　3月 11 日」Pun Suresh・・・78

◇ **仙台国際日記より vol.7「震災ボランティアその2」**・・・79

●「人生で忘れられない数字」趙 京浩 Zhao Jinghao・・・80
●「地震の時私は」姜 泰権 Jiang Taiquan・・・82
●「地震の後」邢 雨微 Xing Yuwei・・・84
●「百年後の大地震」薛 嫚玉 Xuen Manyu・・・86
●「ついていない日　3月 11 日」Phakami Magar Ram Bahadur・・・88

番外編

○「青島（中国）からのメール」車 維華 Che Weihua・・・90
○「Love Letter from Saudi Arabia vol.1」Muhyi Shaker A Alshehri・・・91
○「Love Letter from Saudi Arabia vol.2」Suhail Ahmed R Kalkatawi・・・92
○「Love Letter from Saudi Arabia vol.3」Ghalib Ayad M Alanazi・・・93
○「震災ボランティアに参加して」釜沢 久美子 Kamazawa Kumiko・・・94
○「地震」田中 治美 Tanaka Harumi・・・96
○「今、私たちにできること」瀬戸 稔彦 Seto Toshihiko・・・98

おわりに・・・103

編集方法について

この文集に収められた作文は、当校の留学生たちが日本語で書いた作文を、当校の日本語教師である編集委員が添削したものです。

原則として、日本語母語話者にとって不自然に感じる表現であっても、できるだけ原文を活かすことにしました。ただし、日本語学習者も読者であるという観点から、文法上の明らかな誤りは、修正することにしました。（下記参照）

そのため、日本語母語話者にとっては読みづらく感じる個所もあるかもしれませんが、ご了承ください。

1）句読点：句点がないものには、適当な個所に句点を加える。読点は、原則そのままにするが、打たれている個所以外にも、意味が取りにくい場合は打つ。

2）文体：「普通体（ダ・デアル体）」、「丁寧体（デス・マス体）」は、どちらを用いてもよいが、統一する。

3）段落：原則そのままにするが、全く段落がないものに関しては、適当な個所で段落を設ける。

4）漢字：全て振り仮名を振る。

5）表記：原文でひらがなのものは、ひらがなのままで、漢字変換は行わない。ただし、本来カタカナで書くような外来語（例：こーひー）をひらがなで書いた場合は直す。

6）文法・語彙の誤り：具体的な添削方法の例を以下に挙げる。

①時制の一致：「～ます。」→「～ました。」

②自動詞・他動詞：「～が始めました」→「～が始まりました」

③助詞：挿入「日本人いました」→「日本人<u>が</u>いました」

削除「こわい<u>の</u>こと」→「こわいこと」

訂正「部屋にパソコンを使う」→「部屋<u>で</u>パソコンを使う」

④語彙：「スーパ」→「スーパー」
「電話が着た」→「電話が来た」
「しかん」→「じかん」
⑤文法：「うれしいでした」→「うれしかったです」
「壊れおそれがある」→「壊れるおそれがある」
⑥指示語：「あの人は～」→「その人は～」
⑦呼応：「なぜならば～です。」→「なぜならば～からです。」

7）その他：特に、注釈が必要な場合、その個所の前後に（　　）を用いて、
説明や語彙を加え、意味の理解を促す。

上記にはない誤りや、修正を加えたほうがいいかどうか判断が難しい個所については、編集委員会で取り上げ、複数人で検討したうえで、対応を決めました。

また、意味が取れない個所については、書いた本人に直接どのような意味かを確認し、修正を加えました。

「ワタシタチの３・11」編集委員会

私の地震体験

池　玉姫　Chi Yuji（中国）

３月11日、午後２時46分、私にとっても、多分日本人にとっても絶対に忘れられない日だと思います。Ｍ９．０の大地震、こんなに大きな地震が来るとは夢にも思いませんでした。地震が起きてから１ヶ月半の時間が経った今、そのときを振り返ってみると悪夢みたいです。

先月11日、金曜日、すべてが穏やかでした。私もいつもどおり学校が終わってからコンビニのアルバイトに行きました。１時半から仕事が始まってレジで計算をやっていました。いつもと同じで、あまりお客さんはいなかったんですが、一人か二人か買い物に入ったり出たりしていました。ですが、突然地面が揺れ始めました。コンビニの棚に置いてあった商品がコトコトと揺れる音が聞こえました。急に頭の中で「地震が来た」と思いましたが、そんなに怖いとは思いませんでした。なぜなら、日本は元々小さい地震が多い国なので、本当に地震が来ても、そんなに驚くことではないと思ったからです。それで、最初はあまり気にしませんでしたが、今回の地震は違いました。地面が長い時間激しく揺れて、棚の上に置いたワインボトルが１本、２本落ち始め、揚げ物用の170度以上の熱い油が飛び出して床のあちこちにこぼれてしまいました。生まれてから一度も経験していなかった今回の地震で、本当に初めて死が自分に近づいてくるのを肌から感じました。

時間がどのぐらい過ぎたのか分かりませんが、長い時間の揺れがやっと終わりました。怖くて何も考えられない私は生気を取り戻しました。目の前の情景が信じられませんでした。あちこちに散落した商品や、割れたお酒のビンや、壊れてしまった水道から出てきた水など、また、鼻をつくお酒と油の臭い、すべてが信じられませんでした。ところが、日本人は今回の地震で冷静さを失わずに事故に対していて、感心しました。生気が戻って来ましたが、何をすればいいか、何も分からない私に、店長が声をかけて来ました。「チさん、大丈夫ですか？皆さん落ち着いてください。この後、余震が来る

ので、みんな安全に注意してください！」店長のこの一言に安心させてもらって、私もだんだん落ち着きました。

その後から、買い物に来るお客さんが急に増えてきました。水や食品や蝋燭など避難商品がなくなっても、買い物に来るお客さんが次々に入って来ました。断えないお客さんに対してコンビニのみんなは仕事をやめることができませんでした。仕事を続けている私に「ありがとう」、「頑張ってください！」と励ましてくれるお客さんもたくさんいました。このように仕事が夜10時まで続いて、コンビニの商品がもう全部なくなって終わりになりました。うちに帰る際、店長からうちに少ししか残ってないパンやおかずなどを配ってもらって、一時的にでも食品不足を助けてもらいました。

悪夢みたいな一日が終わって、それから私の避難所の生活が始まりました。短かったですが、近所の日本人たちと一緒に暮らした避難所の生活は、様々な人たちから助けてもらった私にとっては一生忘れられない時間でした。大勢の人が避難している避難所で、寝るところが狭かった私に自分の場所を譲ってくれたおばちゃん。毎日お湯や食品など配ってくれた避難所の係りの人。全然知らなかったんですけど、道で私の安危を聞いてくれたおばちゃん。地震が起きてから一番早い時間に電話やメールで私の安危を聞いてくれた一緒に働いた皆さん。それから、そんなに激しかった地震の中でも、私の大学に入る重要な資料を忘れずに持って来てくれた日本語学校の担任の先生……。それぞれのこと、さまざまな人々に本当に心から感謝しています。

今回の地震は私が生きている間では二度と遭いたくない経験でしたが、私がこれまで歩いて来た25年の時間を一度反省し、人間として、これからどんな人生観を持って行くのか、社会人として、どんな社会観をもって社会を見るのか、深く考えてみるきっかけになりました。

今は大学に入り、新しい生活を始めましたが、今でも避難所で毎日辛い生活をしている避難者がたくさんいるのを知っています。地震で大きな被害を受けた日本、その中で生活している留学生の中の一人として、本当に被災地の復興を祈り、心から応援しています。日本の力を信じています！　頑張ろう、日本！

日本人はどんな様子だったか

Husain Alamri（サウジアラビア）

日本に来る前、日本で地震が起こること、地震の酷さと頻発さを知っていた。さらに、記録と歴史から、地震による被害と死亡は日本で非常に少ない。それで、地震のことはあまり気にしなかった。だって、日本でだれも地震で死なないと思った。私の初めての地震の体験は、全然怖くなかったかわりに、とても面白いと思った。どんどん地震に慣れて、私にとってはサウジアラビアの砂嵐と同じになった。

大きいのが起こった時―前に注意された地震―、地震の大きさが全然分からなくて、普通の地震と思った。周りの日本人は怖がっていて、びっくりした。「どうして？　これは普通じゃない？」。あの日、後で母に電話をもらって、死亡者数を教えてもらった時、びっくりした。今日の地震はそんな酷かった？！地震が起こった後、電気も水道もガスもなかった。次の日、水道と電気が戻って、インターネットがつながって、地震のニュースを見て地震の酷さが分かった。信じられないぐらい酷かった！　津波で１万人が亡くなり、１万人は行方不明者になった。

その理由は日本の土木工事の技術。ビルも橋も道路も地震が起こっても、傷がつかなかった。それを見ると、地震は弱いと思った。ずっと前から、ある国で地震があったらいつもテレビのニュースで、ビルも橋も全部こわれてしまって、大勢の人々が死んでしまうことを見る。けれど、仙台でビルも橋もこわれなくて、住んでいた場所は海から遠くて津波は来なかった。それで、地震の大きさがわからなかった。

地震後に携帯は接続しないで電話をかけられなかったが、インターネットは接続できて、フェースブックにポースト（*投稿）してサウジにいる家族と友達を安心させた。

地震の後、一日中停電だし断水だし大変だった。そして、コンビニやスーパーなどで食糧は全部売り切れだった。レストランも全て閉まっていた。二週間は足りる食糧を買っておいてよかったと思った。私は楽天的なので、全部早めに元のように戻ると思

った。放射能なのに、ずっとそのことを信じた。けれど、みんなは楽天的じゃなかった。外国の大使館は元の国に帰ろうと言って、外国人達は日本から出るのを始めた。私は帰りたくなかったけど仕方なかった。

地震の後、二日間は忘れられないおもいで。略奪がないし、みんなは整然と並んで待っていた。けれど、買う時みんな買いすぎて、私もある時自販機で 12本も水のペットボトルを買った。

日曜日、地震が起こった二日後、東京にいかされて、サウジアラビアに帰らされた。一ヶ月後、日本に戻って、ほとんど全てのことは前のように戻ってきた、驚いた。やはり、日本人は超真面目。

地震の日

Purja Pun Vinod Kumar （ネパール）

日本で地震がおこるのはそんなにめずらしいことではありません。ですから、日本は地震の国ともいわれています。(*ネパールの）小学校で勉強した時も地震があったことがあります。でもそれは小さい地震でした。地震がおこる前いつも地震はどんなことですか、あたまの中ではしっていました。

その日３月11日午後２時46分、僕は学校で勉強していました。みんな日本語の文法について先生とそうだんしながら勉強していました。でも突然大地震が起きました。僕は最初これはすごいたいけんだとおもいました。でも地震はながい時間つづいてきたのでとてもこわかったです。その時はじめて家族のことが目の前にとんできました。ほんとに国のことが心の中にながれてきました。学校がゆれているうちにともだちたちのかおを見ました。みんなのかおのいろはあかくなっていました。たぶんみんな僕がかんじたようにかんじているとおもいました。

地震の後はみんな学校をすぐ出てちかくの公園にあつまりました。ともだちにでんわをしたいけどできませんでした。アパートで水もないし、電気もないし、ガスもないしほんとうにこまりました。だから部屋にすむことができませんでした。ラジオで地震がもう一度おこるおそれがあると発表しましたので、その日の夜、近くの中学校に住みました。けれどもずっとよる１分も目をとじないで過ごしました。それはほんとにわすれないよるでした。

母にでんわした時母はとてもしんぱいしました。泣きながらはやく帰ってくれと言いました。でもここに自分の未来をさがしにきましたので、まけないでがんばります。僕についてしんぱいしないで僕はだいじょうぶですとおしえましたから、すこしあんしんしました。

その後の生活はとてもたいへんでした。僕は国へ帰ろうとおもいました。にいがたけ

んととうきょうに住んでいるネパール人たちはいちいち金をあつめて私たちをてつだってくれました。それはネパール人の心だとおもいました。

中学校に住んだ時日本人たちもいっぱいでした。だから私たちだけじゃなくて、みんなこまっているとわかりました。日本では、はじめてでんきがついていませんでした。スーパーでも食べ物が何もありませんでした。たぶんこのたいへんなことが日本で前はありませんでした。でも日本人たちはまじめですからすぐなおすとおもいます。日本のためにいのっています。

地震が起こる前その時とその後、いろいろかんじました。このたいけんから人の人生は生きるばかりではなく生きている時、いろいろなたいへんなことといっしょにあそびながらいくべきだと勉強しました。またこのちきゅうにすんでいるかぎりがんばることをつづけるのはたいせつですとわかりました。それはなみだがでるほどのたいけんでした。しぬまでわすれられません。

希望の光

Gutierrez Sanchez Victor Manuel（メキシコ）

僕は日本語学校の学生です。一年前から、毎日午後に日本語の学校で勉強しています。この一年間に三回、四回ぐらい地震のために準備（避難訓練）していました。

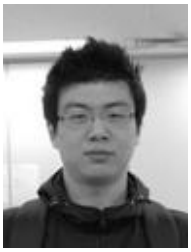
３月11日、ぼくは学校に勉強しに行きました。14時46分、皆さん少し休んでいました。きゅうけいは楽しかったです。とつぜん地震が来ました。教室の中で全部どんどんゆれました。机とか、本とか、かばんが落ちました。皆さんは感じがありました。それから早く机の下に入りました。１分、２分、３分、４分待っていました。でも地震はぜんぜん終わりませんでした。ビルにゆられながら、皆さんびっくりしました。だれかが大きな声を出しました。だれかは静かを続けました。でも皆さん怖かったと思います。その４分、私の人生で決して忘れません。

地震の後で先生たちは学生たちを手伝ってくれました。そのとき希望の光を見ることができました。生徒も先生たちもビルの外へ逃げました。皆さん階段を下がりました。階段をダウンしながら、多くの心配顔を見ました。その人たちは何を考えていましたか？　たぶん私は知ることができません。しかし、彼らの顔はたとえば、おどろき、ふしん、きょうふなど、いっぱいのかんじょうが込めてありました。

外にいたとき、皆さん公園に集まりました。われわれは何もできませんでしたから。校長先生は少し話しました。「皆さんぶじだ」と言いました。それに、「家に帰るとき歩いたほうがいい」とおすすめしました。

帰宅するとき、急に雪が降りました。だから歩くことがちょっと難しかったです。帰り道でたくさんのことを見ました。そのとおりは交通りょうが多かったです。ビルとか道もたくさんこわれました。でも一番おどろいたことは、人々が助け合っていたことです。そのときは、災害の大きさをよく知りませんでした。でも日本人の心の大きさがあきらかにされました。人々が優しいのは、はっきりわかりました。

地震と津波の次の日は大変でした。いろいろ問題がありました。でもいつも人々が支援する方法を考えていました。そんな感じは私にもひろがりました。毎日市役所でボランティアに集まった後でいろいろ問題を提供しました。かくタスクをしえんし、いろいろなことをまなびました。



(無題)

文　貞現　Moon Junghyun（韓国）

３月11日、その時、私は授業をおえたあと、インターネットカフェに行くところだったんです。うちはインターネットができなくて、週末にネットカフェに行くのは私の楽しみのひとつになりました。

道を歩いていた時、いきなり地がゆれはじめました。日本にきてもう２年がたって、地震にはもうなれていましたけど、それは私が今までけいけんしたものとは格がちがうということがすぐわかりました。私は 50mはなれていた公園に走り出しました。つぎつぎビルの中から人々がにげてあつまりはじめて、あっというまに公園は 2、300名の人々があつまりました。だれもいないはずのビルからは、ずっと非常ベルがなりつづけていました。やっとゆれがおさまったと思ったら、道路のあっちこっちからサイレンの音がきこえて、ビルのむこうにはけむりまでみえました。空にはヘリコプターが何台もとんでいたし、また雪までふってきて、その時のまわりのすべては現実感がない状態だったんです。そのせいか私はまだ何がおきたか、どんなひげきてきなさいなんがおきたか、ぜんぜん知らなかったんです。

そのままネットカフェに行ったら、まち中がもう停電になっていました。家に帰ってみたら、さいわい家は無事だったけど、中はもうぐっちゃぐっちゃで、電気も水も、何もできない状態でした。私はカバンに水とカップラーメンをいれて、ちかくにある小松島小学校にひなんしました。その時まで、私は今日１日ぐらいすごせば、あしたになると、ぜんぶもどってくるだろうとあまく考えていました。

でも、翌日のあさ、号外を読んで、自分がいかにバカなことを考えていたかわかりました。人がなくなるなんて、しかも何百、何千なんて、思ってもみませんでした。その時になって私もこわくなりました。つぎの日までこわさと余震でねむれないままでした。

つぎのあさ、私は韓国の領事館に行きました。何もないひなん所よりは、領事館に行ったら水でももらえるかも、という思いでした。さすが領事館には、あるていどの食りょうと水がありまして、みっかぶりにかおをあらうこともできました。けいたいのじゅうでんもして、家族と友だちにれんらくもつながりました。

その時、韓国の放送局の取材チームとたまたまあって、インタビューされたのがきっかけで、かれらの通訳になりました。その日から私は記者たちの通訳として、いっしょに被害現場をまわりました。

直接みた現場は、想像をこえるさんげきでした。その時に、やっと今回の地震がどんなものだったかわかりました。

いろいろな現場をまわりましたが、その中でも一番私の印象にのこっている人たちは、陸前高田のある総合病院で会った病院の人たちです。地震とつなみによって１階はどろだらけでした。こんなところに人がいるはずがないから帰りましょう、という話をしている時に３階から人気がしました。なんと、その病院には160名ぐらいのとしよりやねたきりのかんじゃがいて、そのかんじゃたちのために、さいごまでもにげずにめんどうをみている医者やかんごしたちがいました。その 160名ぐらいのかんじゃは、ほとんどが自力ではうごけない人たちで、つなみがきた時、病院の職員たちは必死に３階まではこんできたのです。病院はもう水も電気もガスも何もない状態で、もう病院とはよべないほどのひがいをうけていました。なにより、くすりがなくなっているのに一番困っているみたいでした。こういう状態でも職員たちがきぼうをもって、いっしょうけんめいかんじゃのめんどうをみているすがたをみて、私はもちろん、取材していた記者やカメラマンもなみだめになりました。

ここだけじゃありません。私たちがまわったすべてのひがいげんばの人たちは、どんな状きょうでもきぼうをすてず、必死で立ちなおそうとしていました。

私たちは人間だから、しぜんに無力ですけど、人間だからこそおたがいたすけあい、またたつことができると思います。私は日本と仙台、またすべてのひがい地いきや人々

が、いつかまたむかしのようなまちにもどれると思っています。こんどのけいけんをして、そうかくしんしました。

私も仙台が一日でもはやくふっきできるように力になりたいと思います。

2011/3/17　「大丈夫です」

仙台市内は、地震による倒壊などの被害はほとんどありませんでしたが、電気や水道・ガスなどライフラインが止まりました。ですが、現在は電気・水道はほとんど回復しており、ガスもプロパンガスは大丈夫で、都市ガスは１カ月ぐらいで回復するそうです。学校は、電気、FAX、メール全て使えます。昨日からエレベータも一台稼働するようになりました。教職員が持ち寄ったり、各地から届いた食べ物や水もあるので、学生に渡しています。

学生の皆さん、学生のご家族の方、仙台国際日本語学校は大丈夫です。

2011/3/22 「学校の様子」

テレビのニュースや新聞を見て、「仙台は何もなくなってしまった」と思っている方も多いと思いますが、そうではありません。確かに海の近くの町では、津波でいろいろなものが壊れてなくなってしまいましたが、海から少し離れた町は、ほとんど前と変わりません。

事務所では地震のすぐ後から、先生たちが働いています。教室も今日掃除しました。いつでも授業ができます。詳しい日程はまだ決まっていませんが、４月から授業を始められそうです。またみなさんに会える日を楽しみにしています！４月に入学する学生にも早く会いたいです！

2011/4/8 「地震の影響」

昨日(4/7)の深夜、また大きな地震が来ました。前回の地震にも耐えたこの学校は、大丈夫ですが、たび重なる地震の影響で、少し壁が壊れてしまいました。エレベータは点検中で使えません。そのため、7階にある学校までは階段を歩かなければなりません。先生たちはハーハー言いながら頑張って上っています。でも、電気は付くし、水も出ます。暖房も付いているので、暖かいなあ。先生たちはいつも通り働いています。

というわけで、予定通り4/12(火)から授業を始めますよ！早く元気な顔を見せてくださいねー！

(無題)

崔　春香　Cui Chunxiang（中国）

３月11日、午前、授業中にこんな一言を先生に訊いたことを、いまだに、鮮明に覚えている。

「先生、最近地震が続いているんですが、そのうち、大きい地震が起こるんではないでしょうか？」

「絶対に起こらないとはいいきれないが、いつものどおりであれば、大きい地震が起こってから余震が来るんだよ。」

その話を聞いた私は多少気持ちが柔らかくなった。なぜかというと、日本に来たばかりの時の話に戻るが、その時は震度２か３の地震があっても、ノートに地震の発生した時間を書き込んだりしていた。今度の東北大震災とは比べものにならないのに。あの時のことを考えると本当に笑いたくなる。そんな「小さい地震でも死ぬんじゃないか」と思ったからである。ばかばかしくて愚かな考えだった。初めの時は地震が本当に怖かったが、だんだん地震はそんなに怖くないんだと思い始めた。だけど、宮城大地震はいずれ来ると思ったから、地震が来ても緊張感は心から消えなかった。

11日の午後、私はいつもと同じくバイト先に向かった。バイト先は蒲生にある海の近くのカーテン会社だった。仕事をしている時に、足元からいつもと違う感じの揺れを感じたので、私は「地震ですよ」と言って事務室を出て、ドアのとなりの壁をしっかり掴んでいた。そのうち止まるんじゃないかと思ったら、もっと大きい揺れが始まった。それで、早速、身の周りに危ないものがないかどうかをざっと確認した。そんな揺れの中でも私の所が安全だと思ったのか、みんなこっちの方に走って来た。私の隣にいた日本人の方は、ご主人が心配だったのか、ひどい揺れの中でもご主人に電話をかけていた。その時は既に電気が止まっていて、電話も通じなかった。けれども、あまりにも揺れが大きかったため、ロッカーは倒れるし、天井も落ちたため埃が一斉に立ってしまい、

呼吸が困難になった。幸い揺れが１分ちょっとで済んだため、大したことはなかった。

皆で非常口を利用して早速、外へ出た。皆無事でよかったと思いきや、以外なことが起こった。日本人の女の子が左の脚を負傷してサンダルが血だらけになっていた。それを見た私は既にもう地震は起きたんだという実感がしたのだ。不思議にａｕの携帯電話はたまに通じていた。管理人が救急車を呼んで、その女の子は病院に運ばれた。

人数確認するときに、一人の研修生の女の子がいないことに気がついた。10分くらい後に、脚に力が抜けたまま二人の間に挟まれて下りてきた。後で聞いてみると、お手洗いに行ったときに地震に遭って、一人だったのでよほど怖かったみたいだ。それに出口は、たまたま自動扉しかなかったので、慌てて出ようとしたら開かないから、頭がパニックになったということだった。

大きい地震が起きてからも揺れは止まらなかった。リーダーはわれわれを耐震に強いビルに連れて行った。それから、いきなり「このビルの中は安全だよ。早く入って。」と言った。それを聞いた私達は「ビルの中で死にそうな思いでいたのに、また、ビルに入らなきゃならないの？」とぶつぶつ言った。電線が揺れ過ぎて、今にも切れそうだったので、ビルの中も外も危ないなぁと感じた。それで、誰一人入ろうとしなかった。その時は自分が海の近くにいるということをうっかり忘れていた。ただ、地震で死ななかったと思っていた。なんと、後で、われわれの命を奪うほどの恐ろしい高さの津波が来るとは。今まで、こんな大きい地震ははじめてだったので、あまりにも驚いて、何をしたらいいかわからなかった。リーダーが私達を説得して全員をビルの屋上にうまく誘導した。

すると、10分も経たないうちに、遠いところから津波が白い泡を立てながら、われわれがいるビルに勢いよく向かって来た。家や車は玩具のように一瞬に、木のくずやゴミになって流されてしまった。ついさっきまで居心地がいいところだった住宅は、どこかに消えてしまい、松ノ木しか残っていない光景を見て、私は唖然とした。津波が来

てから引くまで、あんな短い時間で全部奪い去るとは、本当に恐ろしいものだ。第一波より第二波、第三波の方がもっと恐ろしいと聞いた。幸い、第二波と第三波は、ほかの方向に行った。

その近くに住んでいた日本人の女性が泣きそうな顔で、「私の家がない、私の家がない」といいながら、自分の家を捜していた。ある人は隅っこで涙を拭っていた。たぶん、家族が心配だったのかもしれない。

自然というものは、人に希望を与える時もあれば、失望を与える時もある。このように人間はどんなに強い生き物だとしても、自然災害の前では弱いものだ。その後、津波は退き始めた。すると、ところどころから住宅や工場が燃え始めた。本当に映画の大作を見ているような感じだった。われわれはもう安全だということを確認してから、二階に下りて津波が完全に退くのを待った。

仕事中に地震に遭ったので、皆薄着だった。それに雪も降っていたから、寒くて寒くてならなかった。それで、配られた大きいビニール袋をかぶって、なんとか体を温めることができた。

地震が起きた後も余震はとまらなかった。そのため、再び津波が来るかも知れないと言っていたから、そのまま待つよりほか仕方がなかった。ある工場は一晩中燃え続けた。時には爆発する音も聞こえた。

５時ごろから明るくなり始めた。すると紅い太陽が東から昇り始めた。普段より余計に紅く見えた。勝利した気分だった。その一方、心が寂しかった。地震が起きても、津波が来ても、人がどれくらい死んだとしても太陽は裏切ることなく昇ることに。

こんな怖い中、やっと、朝７時ごろ自衛隊の姿がちょこちょこ見えてきた。よく見ていると、白い布で包まれた死体を担架で運んでいた。衝撃だった。９時ごろわれわれは無事にその建物を出た。

外は酷かった。魚はあちこち死んでいるまま、散らばっていた。もう少し歩いているとキリンビール工場の中のビールやジュースなどが流されて、一面に転がっていた。

まるでビールの王国に来ているようだった。

後は自衛隊の車に乗って、中野栄にある中学校に運ばれた。海辺を離れてからというもの、やっと、心の奥底にある怖さや寂しさを緩めることができた。

そこから仙台までソンさんと歩いて来た。まるで、地獄から天国にまで歩いて来ているような気分だった。飢餓の中から脱出したからである。仙台にもどった最初の日は避難所ですごした。そこで、おにぎりを一個もらって食べたのが、地震が起きてからの第一食だった。久しぶりのごはんだった。

その後からはずっと、家に戻って皆で作って食べたりした。するとある日、遠藤先生がガスや水、食べ物など、生活に欠けてはいけない物を持ってきた。これほど有難いことはない。とても感動した。われわれのことを何時も思っていることが嬉しかった。

さて、その後、地震のため、私も一時帰国した。けれども、両親から「今度こそ日本には行かせない」と散々反対された。正直に言うと私は、日本語学校のブログを見て、再入国することを決めた。相変わらず頑張っている先生達、いつも学生のために第一線を走っている先生たちを見て感動したのだ。

それに、日本語学校を卒業して、目標に向かって、一生懸命に頑張ろうと思ったのが、「地震とともにどこかへ消えてゆく」ということを考えているとなんとなく寂しくなった。目標を失うとまるで、空を飛んでいる翼のない鳥のようであるからだ。飛んでいるうちにどこかへ落ちるだろう。それで、激しく反対している両親の言葉も聞かずに日本にもどって、目標に向かって頑張って行こうともう一度決心した。私が頑張っているように、東北・日本も自分の目標に向かって頑張ってほしい。

日本がんばろう　仙台がんばろう

Lkhagvadorj Ganbayar （モンゴル）

ぼくはせんだいこくさいにほんごがっこうのがくせいです。３月11日ひる２時45分、おれががっこうにいるときじしんがおきました。せんじつおきたしんど７だった。そのときしぬかもしれませんでした。とてもこわかったです。もうそのじしんとおなじじしんがおきたらしぬかな。じしんのとき、はしれないし、たてないし、ひとたちはがっこうからでました。そのとき、たのしいけど、しぬかなとおもいました。

がっこうからでて、おれはうちへかえりました。うちのそとに、かのじょとモンゴル人２、３人がいました。あとで、おにいさんとおねえさんもきました。みんなかいかんへいって、そこに３日とまって、しぬかもしれなかったから、そこからバスにのってやまがたについて…・タクシーでいって…・ついてそこからとうきょうまでしんかんせんにはじめてのりました。とうきょうについて、またバスにのってなりたくうこうについて、1日とまって、３月16日にモンゴルについて、きもちがよくなりました。かぞくのひとがみんないるし、ともだちもいました。そのとき、WOWL（*古いモンゴル語で「幸せ」の意味）になったとおもいました。おかしいけどこわかったです。

にほんについてたくさんはなしました。みんながないているとき、おれはわらいました。なんでかというと、たくさんおかしいことをしていたからです。―たくさんあるからかきません。そして４月13日、ちばにいるとき、またじしんがありました。「ええ、なんでもどりましたか」とおもったけど、「わたしはべんきょうするためにきたでしょ」とおもって、「がんばれがんばれ」といっているんですね。

４月18日がっこうにいきました。みんなげんきでした。とてもうれしいし、ほんとにみんなしんぱいしました。にほんがんばろう、せんだいがんばろう。

モンゴルにいるとき、せんせいたちも、たくさんにほんにいるともだちもしんぱいしました。ちちとははが、「あなたがしんだ」といったとき、ぼくは「ぜんぜんしなない。

そんなのちいさいことでしなない。しんだらやりたいものはぜんぜんなくなるから」といって KISS しました。きょうは４月25日です。３月11日からいままでじしんがありますね。とてもこわいですね。じゃ、おわり。

(無題)

Bhandari Madan（ネパール）

はじめに、東日本大震災により、被災された皆さんに一日でも早く復興できるよう心からお見舞い申しあげます。

平成23年３月11日の東日本大震災で、日本の国民とともに色々な国から留学している、私達、外国人の日常生活も厳しいものになりました。

地震ももちろんですが、津波で大きな被害を受けた東北地方の様子は、私にとって自然の怖さを知る貴重な経験になりました。

地震が起きたのは、私がアルバイトをしていた時でした。地震の経験がない私は、最初は何が起こっているのか気が付かなかったのですが、日本人の人達がみんなあわてて外に出たので私もみんなについて外に出ました。外に出てやっと気が付きました。それは非常に大きな揺れでした。外に出て上から落ちてくる物の無い安全な所に皆で固まって、地震の揺れがおさまるのを待っていました。でも地震は非常に長い間続きました。揺れが少しおさまってから、みんなのロッカーに閉まってあった物を、何か入れ物を持って行き、それに入れて持って来る事にしました。危険なので、数人だけが行って、みんなのロッカーに入れてあった物を持って来て、そのまま家に帰る事になりました。

私はいつも、家の近くの駅から電車に乗り、五つ先の駅で電車を降りて、そこから自転車でアルバイトに通っています。当日も帰るために自転車で駅まで行きましたが、電車が止まってしまっていたので自転車で家に向かいました。もう少しで家に着くという所まで来た時、津波がこちらに来るのが見えました。津波はあっという間に私の足元まで押し寄せ、驚いた私は自転車を放り出し、いま来た道を走って戻りました。それから、どこに行っていいか分からないので、あちらこちらと歩き回り、たくさんの人達が集まっている所を見つけては行ってみたりしました。その日の夜はとても寒かった

のを覚えています。そうして４日目に、偶然にも日本人の知っている方に会い、その方が自分の自転車を私に貸してくれたので、やっと家に帰る事が出来ました。

家に帰ってもライフラインがなにも無く、近くの小 中 学校に行きました。そこに行っても、食べ物とか飲み物とかが不足している事を知っていましたが、それでも何かもらえるかなぁと思い、皆が並んでいたところに私も並びました。残念ながら私のところまで来る前に配っていたものが全部無くなりました。それでも周りのみんなの笑顔を見たら、私もとても幸せな気分になりました。

でも、地震で携帯電話をなくした私は家族と連絡が取れなくて凄く心配でした。心配しながらも４日間は連絡が出来ませんでした。やっと４日後、友達の電話から家族に連絡をする事が出来ました。家族には、地震と津波の事でではなく、放射能汚染の事で国へ帰って来て、と言われました。でも私の気持ちは変わらないまま、帰らないことを決定しました。日本に来てそろそろ２年が経つところで、こんな被害が起きたからといって２年間もお世話になった先生方や友達を置いて帰るなんて、考えただけで、悲しくなりました。ずっと日本にいて自分が出来る事をやり、みんなと協 力 して一日でも早く日 常 生活に戻れるようにがんばりたいと思っております。

初めて大地震体験しました

Villamil Lopez Domingo Edgar（メキシコ）

僕は仙台国際日本語学校の学生です。メキシコ人です。今年、日本の歴史で一番の大地震がありました。とても怖かったです。３月11日午後２時46分、私は学校の中にいました。私のクラスは交雑音を聞きました。すぐ大地震が始まりました。

早く皆は机のしたに入りました。女性たちは泣き出しました。私は２人でほうようしました。地震は止まりませんでした。皆とても心配でした。先生たちは「はやくでます」と指示しました。皆で階段を走りだしました。

外でわたしはびっくりしました。いっぱい人々がいました。皆携帯電話を使いました。私は家族と友達を思いました。１時間ぐらい公園で待っていました。後で校長先生が「今から皆は自分の家へ帰ります、気を付けてください」といいました。

ヴィクトルさんとわたしは一緒に住んでいますから、一緒に帰りました。4時ぐらい、案外雪が降りました！びっくりしました！道を帰りながら、たくさんくるまがありましたね！たくさん人々は歩きました。皆の顔はとても心配そうでした！私は「今から何をしますか、どうしますか、てつだってあげたいです、どうしますか」とおもいました。

家に帰った時、とても悲しかったです。たくさんのものがこわれてしまいました。私の部屋に失調を見かけました。一番のもんだいはラ・サールの子供たちです。皆の安全が目的でした。

コミュニケーションは無理そうでした。電気がないので、けいたい電話はできませんでした。くるまもこんでいて、カオスでしたね！

夜、仙台市はかわいそうでした。電気がないから私たちはろうそくを使いました。たくさん救急車のサイレンがひびきました。ヘリコプターもたくさん飛びました。20分かんかくぐらいで地震がきました。疲れをとりたかったですが、無理でした。次の日は朝早く、食べ物と飲み物をたくわえました。家ではサービスがぜんぜんできませんで

した。たとえばガスとか、水とか、電気がありませんでした。つきませんでした。本当にたいへんでしたね！

この日の11時30分、電話をもらいました。メキシコの有名なテレビの会社でした。びっくりしました。「ドミンゴさん、今接見シテイイデスカ？」ということでした。私は「はい、大丈夫です。」と答えました。だから接見が始まりました。私は本当にそわそわしませんでした。メキシコ人は心配するけど、わたしはいいニュースをはなしたかったです。メキシコ人が心配しないことが目的でした。

この日の夜、携帯電話のインターネットが使えました。「すごい！よかった！」。自分のことばでした。たくさんメールをもらいました。皆心配でしたから、いろいろコメントを書きました。すごい気持ちがありました。本当に嬉しかったです。やっぱり私の家族からコミュニケーションがありましたよ。だから神に感謝しました。元気でしたから必要なものもありませんでした。

夜の日は忘れがたいけど、いっぱい覚えたことと伝習もかちえました。

悪い経験なのに私は日本人に感心しました！！本当に日本は皆で一緒に頑張りましたね！今も頑張ります！日本国はチームみたいです。

子供の時、日本の文化が大好きでした。今私は日本に敬意をあげます。あげたいですけど、日本語がへたですけど、少し仕事はできますね！それなのでボランティアをしています。いろいろな仕事ができました。掃除をしたり食べ物と飲み物をあげました。いろいろなところへいきました。石巻としおがまといわぬまです。

テレビから私も言いたいです。「一人じゃない、皆で一緒に頑張りましょう。日本はチームです」。日本のために祈ります！！！

私が遭った大地震

李　文学　Li Wenxue（中国）

地震に遭ったことがありますか。いつもテレビで見ていた自然災害、地震、津波などの想像できない問題が、今日私がいるところで起きました。

2011年３月11日14時46分宮城県仙台市で震度７の大地震が起きました。その時は授業が終わってちょうど休み時間になったところでした。私は休み時間を利用して作文を完成させたくて、教務室に消しゴムを借りに行ったところでした。廊下にはいろいろ国の留学生たちが遊んでいました。ネパールの学生さんは松田先生に「先生地震です！」と冗談を言っていました。松田先生が「うそでしょう！」と言ったとたんに、学校の建物はすごく揺れて来ました。最初はちょっと揺れるぐらいでしたが、どんどん大きくなりました。私のクラス担任の遠藤先生が走って来て大きな声で「早く机の下に入りなさい！早く！」と言いました。みんなは怖さで、どう動くか忘れてしまったみたいでした。でも生きるために机の下に入りました。みんな静かになりましたが、建物が揺れているので、恐い音がきこえるし、机と机がぶつかるし、教室がめちゃくちゃになって、廊下では女の泣いているこえ、先生の大きなこえ、荷物が落ちて割れる音がして、電気もきえて、世界が黒くなって、私の頭の中には「死ぬ」という言葉しかありませんでした。だれもこの地震がいつ終わるか分からないですが、早くとまってくださいという感じでした。

たぶん２分くらいたって地震が小さくなりました。何分かあと、先生が来て「重要な物を持って階段から走らないで建物から逃げなさい！」といいました。そのあと、私はすぐだれよりも速く荷物を持って階段から外に出ようとしました。そこで発見したのは、みんな心はとても恐いのに、誰もパニックにならないで、全員並んで階段から外に出ていく様子でした。

外には大勢の人がいて、何か前に約束をして集まったみたいでした。あちこちから聞

こえる救急車の音、消防車の音。ちょっと煩く聞こえましたが、いろいろな建物から煙が出て火事で大変でした。私は友達の携帯でニュースを見ました。ニュースによると、仙台の海の近くに住んでいる人達は、みんな津波でとても危ないということでした。若者はすぐ逃げたんですが、年寄りなどは家も出られなかったので、全部津波に飲まれてしまいました。その画面は本当にかわいそうでした。

何分かあと、先生から「日本語学校の皆さん。大丈夫です。今日の授業はここまでです。家に帰ってもいいですよ。でも気をつけてください。余震がまだ来るかもしれないから。」といわれました。みんなは恐くて家にも帰りたくなかったです。

私は友達に電話を掛けたんですが、電話はつながりませんでした。一緒に住んでいる友達が無事かどうかわからなくてとてもしんぱいしました。足が震えて歩くのも難しかったです。家の近くに着くと、友達や兄がとても久しぶりに会った感じで「文学、元気なの？大丈夫なの？」と自分のことよりも、もっと関心を示してくれました。みんなで相談して、みんな家に入って大切な物を持って、20分後アパートのまえに集まりました。家は危ないですから、できるかぎり外にいるほうがいいと思いました。私達は地震の経験もないので今からどうすればいいかわかりませんでした。外は寒いし、ずっと外にいるのは無理でした。

その時、日本人がとても急いでどこかに行きました。ちょっときいてみたいですが、みんな忙しそうで何もできませんでした。私はどうすればいいかなといい方法を考えているうちに、大雪が降って来ました。それは何の意味か、神様が怒っているのか、理解できませんでした。大雪もかまわず、学校に行って先生にきいてみました。先生の情報によると、小学校には避難所があるということでした。

小学校の運動場では、人があんまり見えませんでした。雪はもっとたくさん降って来ました。私たちは何の方法もないので、そのまま運動場にいて大雪で服が全部濡れました。

ある日本人が私達を見てすぐ小学校の右側に体育館があるので、あっちが避難所で

すよとありがたい情報を知らせてくれました。

中には人がたくさんいました。あんまり席もないし、私は背が高くて、こんな小さい席に座るのはつかれるんで10分ぐらいすわったり、そとに出たりしました。夜はお腹もすいて来て、水とか電気とかガスなどがないので、カップラーメンもそのまま食べました。ある日本人は、私たちが食べるラーメンをおいしそうと言って一緒に食べました。

深夜になると電話が少しつながりました。国のおばあさんをはじめ、外国の両親はとても心配していました。だいたい２時間ぐらい電話しました。地震の後、海外のニュースでは日本が地震と津波で大変だということを、もっとかわいそうに報道しました。それで、家族は私のことが心配になり、当然すぐ国へ帰って来いという強い態度になりました。

その日は本当にたいへんでした。自然災害とはどういうものかも分かりました。お金で体験できないこともあるので、今かんがえるなら、いい経験でした。

2011/3/18「手作りの小さな卒業式」

今日3月18日(金)は当校の卒業式でした。

例年は大きい会場で卒業生、在校生、学生のご家族の方々など多くの人が参加するイベントなのですが、今年はご存知の通り、大きい地震の影響で卒業式は中止になり、学生の多くが帰国したり、仙台を離れたりしてしまいました。

しかし、仙台国際日本語学校は地震にも負けません！仙台に残っている学生と教職員とで教室を飾りつけ、手作りの小さな卒業式を行いました。

校長先生の「地震から復興する日本を見て勉強してください。」「日本と世界をつなぐ架け橋になってください。」という力強い挨拶に学生たちもうなずいていました。また、卒業までの写真を、スライドショーにして上映。

思い出のあの場面に笑いあり、涙あり！

そして、卒業証書の授与。受け取った学生の顔は皆、輝いていました。

ここでサプライズ！　遠藤先生によるギター演奏＆歌の披露。なんでもこの日のために、6年ぶりにギターの練習をしたそうです。良い先生ですねー。学生たちも歌に合わせて手拍子を送ります！盛り上がりました！

式の後は、持ち寄ったお菓子とジュースで Party！

また、1人ずつ記念撮影をし、すぐ印刷してプレゼントもしました。

今日卒業式の準備をしてくれた学生のみなさん、ありがとうございました！

思い出に残る良い卒業式になりました！

卒業生のみなさん、卒業おめでとうございます！

ときどき遊びに来てくださいね！

新しい生活　３月11日

Garbuja Pun Devi（ネパール）

今年2011年３月11日でした。私は日本にいますから、うれしかったです。急に大きい地震が有りました。その時、私は学校の７階にいました。私にとって地震は初めてでしたから、とてもびっくりしました。その時、私の生活は終わると思いました。でも私の学校には、悪いイベント（*被害）がありませんでしたから、私はうれしかったです。その後で、私は学校の本、かばん、全部やめて外に行きました。それから、先生と学生は公園で立ちました。その時、エンドウ先生は「大きい津波があります」とおっしゃいましたから、私はこわかったです。

たぶん午後の４時に部屋に行きました。でも部屋にガスもないし、電気もないし、水もないし、私は心配しました。私の頭に方法がないから、外に立ちました。その時、３人目日本人が来ました。「小学校は安全ですから、その学校に行きます」といいましたから、私と６人のともだちは小学校に行きました。その学校にたくさん日本人もいました。みんな一緒に座りました。その夜も小さい地震が何回もありました。夜、とてもねむいですから、くつと一緒に寝ました。朝、部屋に帰りました。それから私たちはびんをもって水を探しました。水探しの時、おなかがとてもすきましたから、次の小学校で水とおにぎりをもらいました。それから私たちは、その小学校にいました。その時、私はネパールの家族を思い出しました。そして少しなきました。

次の朝、私は買い物のために、長い時間並びました。その時、私よりとても年上の人も並んでいました。その人も大体１時間30分立ちました。それから私の心に勇気が来ます。「私はわかいですから、がんばります」とおもいました。

国へ帰る気持ちはしませんでした。でも私の家族がとても心配でしたから、私は東京まで行きました。それから私は国へ電話をかけました。「私はとても安全です。心配しないでください。」といいました。そして、私の家族はちょっとうれしかったですか

ら、私は１週間東京にいました。でも東京の人はみんな、仙台よりもっと心配していて、「どこへ行ったほうがいいよ。何を食べたほうがいいよ。全部日本は今安全じゃありません」といろいろなことを聞きましたから、私は仙台に帰りたかったです。ですから、３月24日に帰りました。その時、私の部屋にガス、水、電気がありましたから、とてもうれしかったです。今４月12日から学校がはじまりましたから、うれしいです。私はこのイベント（*出来事）をいつでも忘れませんでした。この時間にみんながんばってください。一人じゃないよ、私もあなたたちを支えます。みんながんばりましょう。

日本頑張ろう、仙台頑張ろう！

魏　峰　Wei Feng（中国）

僕は仙台国際日本語学校の生徒です。今回の東日本大地震は僕の一生で忘れない事です。3月11日午後２時46分、僕が家のインターネットでNARUTOを見ている時、突然地震が起きました。先日起きたマグニチュード７の地震が遠因かもしれないと思いました。いつも地震を気にしていない僕も、11日の地震の時には、家の外に飛び出しました。この時、揺れが大きくなって、走れないし立てないし、目の前で家が揺れて、壁が落ちて、路面が揺れて、頭が混ざって、アパートの下の階にいた仲間の名前を吠えるように叫びました。涙が落ちました。でも、この涙は怖い涙じゃなくて、悔しい涙です。どんな強い人でも自然には勝てません。仲間がまだ家の中にいるのに、僕には何もできなかった…。仲間はみんな無事でした。でも部屋に住むことができません。日本語学校の聴解の授業で、阪神大震災についての文がありました。地震の後は水もないし、電気もないし、ガスが爆破する可能性もあるということを勉強しました。だから僕は先にガスを止めて、水道の中に残っている少しの水を集めて、パスポート、外国人登録証、財布、お菓子等を持って、小学校へ避難しました。

何故避難所へ行ったかというと、大地震が起きたら、また余震があると聴解の授業で聞いていたからです。もし部屋が倒れたら、救援チームは必ず先に避難所で救援します。避難所の人は生きる可能性が増えます。また避難所には水も食べ物もあります。避難所では一日に500mlの水が一本、おにぎりが一つでした。少ないけど、生きるのには十分です。

４月７日夜11時32分、この文を書いているとき、また地震が起きました。震度６強でした。僕は無事でしたが、３月11日と４月７日の地震でたくさんのものが失われました。たくさんの友人と一緒にするはずだった卒業式は一人の卒業式になってしまいました。しかし僕は食物を無駄にしないこと、もっと命を大切にすることを学びました。すべて今回の地震が教えてくれました。誰でも一人じゃない、みんながいる、心の絆で結ばれているから。立ち上がってください。日本、頑張ろう！　仙台、頑張ろう！

命の試練

陸　余嘉　Lu Yujia（中国）

３月11日、私は昼ご飯を食べた後、石巻行きの高速バスに乗りました。２時46分、バスの中のアナウンスが流れて、今地震が起きたと聞きました。最初は震度５か６かと思いました。でも、揺れがどんどん強くなりました。この時、もしバスが倒れたらどうしようかなと思って、逃げる方法を探しながら、「絶対倒れないで」と心から祈りました。約５分後、強い揺れがやっと終りました。でも地震で家屋が倒れてしまいました。バスの行く路線が変わりました。バスを降りて、避難所を探そうと思いましたが、道が全然わかりません。困っていたところに、日本人が私を小学生と思って、私をつれて一緒に避難しました。大体20分ぐらいかかって、ついに避難所に着きました。この避難所は住吉中学校でした。私は体育館に入ったとき、そこには人がいっぱいいました。そしてどんどん増えていきました。でもこの時の私は安心することができません。なぜなら、本来叔母とほかの場所で会う約束がありました。いま電話が通じないし、叔母の状況が全然分かりませんでした。「今はどこ？避難所に行きましたか？」と頭の中で何度も何度も繰り返しました。この思いを持ちながら、携帯電話で叔母に連絡し始めました。午後６時半頃電話が通じました。叔母はほかの避難所にいました。無事でした。私は少し安心しました。地震の後、もう数時間が過ぎました。余震がまだ続いていました。もう数え切れないほどでした。夜、体育館は浸水してしまいました。津波は直接受けていませんでしたが、水が多過ぎて、ほかの所に染み込んできたのです。この状況を見て、体育館２階のギャラリーへ移動しました。体力を保存するため、寝ようと思いましたが、寒さで全身が震えていました。下は全部水が流れる音、電話もないし、水がどれほど上がるのか全然分かりませんでした。本当に怖かったです。この恐怖は一夜続きました。

四日後、ついに叔母に会いました。この経験は一生忘れません。再び命を大切にすることが分かりました。この災害にまけず、一緒に頑張りましょう。

世界のしんぱいな地震

Pun Dilip Khorja（ネパール）

ぼくはネパール人です。今は仙台国際日本語学校で日本語を勉強しています。日本へ来てから地震の経験は初めてでした。その日は今年の３月11日でした。午後の２時46分に起きました。その時、私は学校でクラスの掃除をしていました。前にいた友達が「地震」といいました。私たちは小さいと思ったけど、その地震はだんだん大きくなって来ました。それで、学校はすぐ黒くなりました。学校の中のいろいろな荷物が落ちる音が聞こえました。学生たちもみんな明るくなって、心配な音を出しました。その時、ぼくは何をするかぜんぜんわかりませんでした。どうすればいいですか、それもわかりませんでした。先生たちは学生たちが心配だから、みんなに「危ないから机の中に入ってください」といいました。私も入りました。そこで、神様を思いました。お願いいたしました。ほんとにこのビルは高いです。これからもちろん倒れます。それから死ぬかもしれませんと思いました。その地震はとても長かったです。だいたい４分ぐらいでおわりました。その地震がたぶん小さくなったと思って、先生たちは「外にゆっくり走らないで行ってください」といいましたけど、みんな走って外に行きました。外に着いて、みんなの顔を見ると赤くなっていました。先生たちはみんなを集めて、「心配しないでください」と言って、これからどうすればいいか、話しました。その話を聞いて、部屋に帰りました。

帰る時に、道でも信号もないし、人々もたくさん歩いて帰っているのを見ました。その時、雪も降ってしまいました。部屋に着いたら、部屋を見てびっくりしました。荷物はぜんぶ落ちてしまいました。テレビとか冷蔵庫も落ちました。それよりもっと大変なことは部屋で電気とか水とかガスが使えないことでした。それで、「どうしようかな、何を食べますか」と思って、みんな集まってコンビニとかスーパーへ行きました。みんなの一番大きい問題は食べ物とか飲み物だから、コンビニでも人が並んでいました。私た

ちも並んで、少し少し食べ物を買って食べました。その夜どこで寝るかわかりませんでした。せんぱいたちは「小学校へ行こう。そこにみんな人々がいます。安全です。」といいましたので、大切なドキュメントをもって行きました。そこに着いて、おばさん、おじさん、子ども、みんなを見て、心配しました。でも、そこにみんな一緒に集まって住むと、あまり心配しませんでした。前は、一人でいるとき、小さい地震が起こっても、とても危ないと思ったけど、そこに住んでいる時は、何回起きてもあまり心配しませんでした。その時、ぼくは「みんなでがんばれば、どんな問題もすることができます」と思いました。そこに夜一回も寝ないで、明日になって私たちは部屋に帰りました。部屋に何もないから、スーパーでカップラーメンを買いました。でも、おゆがありませんでした。「どうしますか」と考えたとき、となりのおじさんが「お湯ないですか」と言って、私たちにくれました。その時、とてもうれしくて、おじさんに「ありがとう」といいました。後の日も、ご飯とか飲み物が問題だったから、「ここより東京へ行ったほうがいいですか」と思って、友達の部屋に行きました。そこでは、食べ物とか飲み物の問題はなくても、地震は起きました。それで、みなさん。地震はいつでもどこでも起きるかもしれません。どんな地震が起こってもがんばりましょう。ひとつひとつ心があったら、大きい心になります。それで、どんな問題が来てもだいじょうぶです。みなさん。いっしょうけんめいがんばりますよ。

私の東日本大震災に思うこと

王　孝銘　Wang Xiaoming（中国）

あっという間に３・11東日本大震災から２ケ月あまりが過ぎた。まるで悪夢のような地震が起きて、多くの貴い命が奪われた。この間にペンを取って何か書かねばという気持ちが強くなってきた。書こうというより、むしろ書かなければならないと。なぜならば、自ら被災地にいるけれども、文明を破壊し、命を奪う災害に対して、私はなにもできないというつらい気持ちを持ったからだ。それに、震災のあとはいろいろな事を経験し、いろいろな人から助けられて、感謝の気持ちも一杯である。そのため、この文には、外国人の目を通して震災を受けた日本人の様子を描きたいと思う。そして、被害を受けた人たちに対して、謹んで励ましの気持ちを伝えたいと思う。

[１]自覚編

地震が起きた翌日。大地震以来、余震があいついで起きていた。みなの疲れも極まり、氷点下の気温にもかかわらず、外で寝たままの人の姿も見られた。私は朝起きて買い物のため急いで出かけた。自転車に乗りながら今後の生活を考えていた。「家もめちゃくちゃだし、水、電気、ガスもないし、こんなにひどい状態に陥って今後はどうしよう」と迷っていた。ところが、家の近くにあるごみ収集所を見て気がついた。ゆうべまでなかったところに今朝は仙台市のゴミ袋が整然と山積みなっていた。ふと心を弾ませて感動した。「このような大きな被害を受けた場合、自分の安全はともかく、時間を惜しんで食べ物を争って買うはずだ」と私は思っていた。しかし、日本人はきちんとルールを守って政府に迷惑をかけないように、なるべく自分のするべき義務を果たしていた。これは尊敬に足る行為だ。

午前中、私はあるレストランの前で行列に並んでいた。大勢の人が並んでいるので、いつになったらもらえるかだれも知らなかった。しかし、そういう厳しい状況でもま

わりの日本人は文句を言う人がまったくいなかった。その光景を見て、不満一杯の私は一瞬にして冷静さを取り戻し、自分のいらいらした様子に対して情けないという感情を持った。そこで、私は気がついた。みな意識的に老人や子供連れの女の人に順番をゆずっているのだ。命にかかわる大切な時でも相手の立場に立って考える日本人。私を感動させた。さらに並んで疲れた私たちのために、店で働いている人たちはたぶん一口も食べずに、ずっと働いていたであろう。突然、店の人が出て来て、私の後ろ3番目の人の前でお辞儀をして謝った。

「大変すみませんが、今日配るのはここまでで終わりです。ほんとうにすみません。」

こんなに長い時間並んでいて、そこから後は配らない。「あの人はきっと怒るだろう」と私は思った。不思議なことに、その人は「はい、分かりました」と言ったまま歩き去った。その後の人達も自発的に解散した。私はもう呆れた。さすが自覚的な日本人だ。

[2]忍耐編

地震が起きてから4日目。私はある友だちが務めている工場を訪れた。工場までの間、道に沿って多くの店は復旧作業も始めていた。お金のためか、あるいは別の原因があるのか、何で作業再開にこだわったのか、余震が続いて発生しているのに、私は分からない。工場について目の前の現象にびっくりした。めちゃくちゃに壊れた部品があちこちにつみ重ねられ、大勢の人が大忙しで運んだり、掃除をしたりしていた。さっき抱いた疑問について社長に伺った。次のような答えが返ってきた。

「地震は人間の力によってコントロールする事はできない。ただ生産する事を人間はコンロールできる。いつ起きるか分からない地震に対しておそれるより、むしろ時間を生かして人間の助けになることに取り組んだほうがいいと思う。生きることは頑張ることだ。将来のことはともかく、現在の目の前の事にきちんと対応していくべきだ」

そういう話を聞いて私はとても感動した。たしかに、聖書には「すべてのことは時がある」と書いてある。将来のおそろしいことばかり考えているより、むしろ強くな

って現在のあるものを生かして仕事をするべきだ。日本人の忍耐と生命力に、ほんの少し触れることができた。

[３]団結編

地震が起きてから３日目。余震が緩やかになる兆しはまだ見えなかった。そして、テレビでまだ強い余震が来る可能性があるので、津波注意報はまだ解除されていなかった。そのため、とても疲れている私はまず避難所で一晩を過ごすことに決めた。でも、日本語もうまく話せないし、食べ物や布団もないし、だれも知っている人のいない避難所に行くことはちょっと心配だった。想定外だったことは、避難所の雰囲気は避難所と言うより、むしろ集会所というほうが正しいと思った。みな知り合いにしろ、初めて会う人にしろ、お互いに相談したり、災害の影響を訴えたりして家族のようにもちつもたれつしていた。そして、食べ物をもらった時、私の学校の先生の姿を見つけた。先生は大忙しでみなのために食べ物を配っている。あとで、先生に聞くと、先生は「私は係の人じゃありません。ただ、係の人が足りないから、ちょっとボランティアの仕事をしています」と答えた。

災害の時、日本人は一瞬にしてチームになった。さらに、夜になって、気温が下がるため、みなお互いに毛布とか、服とか借り合う事はごく普通の現象だった。冷淡な顔もなく、余震があるにもかかわらず、心と心の限界もなく、みなひとつになって、頑張っていた。

[４]責任編

地震が起きてから５日目。余震はともかく、放射能物質の影響も広がってきた。その時、大使館からの迎えのバスが来た。両親にも「早く帰りなさい」と促されたので、まず中国に帰ることを決心した。しかし、日本に戻るためには、再入国で使用する印紙を買わなければならない。「こんな非常時にも郵便局は営業するのかな」という疑問

を抱いて、午前中私は郵便局へ行った。

「いらっしゃいませ」。平日と同じあいさつをかけられた。「みんな平気なのだ」と私は思った。でも、印紙を渡された時、「中国に帰りますか」と急にある職員に聞かれた。いつもはサービスのルールをきちんと守り、お客さまの事を尋ねることはまったくなかった職員から、そんな質問をされたのははじめてだったので、私はびっくりした。

「はい、今ちょっと危ないですから。あなたも安全な所に移ったほうがいいですよ」と私は勧めた。その職員はしわを眉間に集めた。

「そうですね。でも私はここで仕事がありますから。ただ、子供は両親に預けて、ほかの所に移します。私は大丈夫です」。そう言って、「是非、家に着くまで安全に気をつけてください」と丁寧に教えてくれた。

そして郵便局の全員が私のほうに向かってお時儀をした。私はその瞬間、言葉にならなかった。

郵便局から出てタクシーに乗ろうとしたが、なかなか見つからなかった。今は、ガソリンもないし、利用する人も多かった。その時、ある空いているタクシーを見つけた。タクシーに乗った。私は声をかけた。

「こんな厳しい状況でも仕事ができるなんて、偉いですね」

「いいえ。お客さまはどこへ向かっていますか」

「市役所です。私は今、安全を求めて中国に帰ろうと思っています」と私は言った。

「実は、息子とまだ連絡が取れていないのです。彼は地震の時、石巻に行ったんです。今は……」

長い間の沈黙。

「なんで運転し続けることにこだわるのですか。早く息子さんを探したほうがいいんじゃないですか」と私は言った。

「テレビで現地の状況がひどいし、交通も渋滞で行けない。私は一人ではなにも

できないでしょう。それより、むしろここでのほうがもっと役に立つと思う」

ついに私の心が温かくなった。多くの人が責任を持って、仕事にこだわっているからこそ、私は中国に帰ることができる。そんなに強い責任感を持っている人にくらべると、自分の弱さを正視することができなかった。

[5]犠牲編

地震が起きてから6日目。災害地域から退却した 2,000人あまりの中国人は新潟の東総合スポーツセンターという避難所に着いた。混乱する仙台から脱出したが、気持ちがゆるめられなかった。まず、連日の疲労がたまっている体はもうもたなかった。そして、一日何も食べなかったから、お腹もすごくすいていた。「安全な所についたら、食べ物をもらうことはもうできないであろう」と私は思った。その時、センターのアナウンサーの声が流れた。

「被災地からいらっしゃった中国の方は、今センターの玄関で食べ物を配りますから、どうぞご利用ください」

「聞きまちがったかな」と私は自問自答した。疑問を抱いて玄関に行った。みんなといっしょに行列に並んでいた。

「そんなに多くの食べ物がありますか」。私の近くにいた人が中国人の係員に尋ねた。

「ご安心ください。日本政府は緊急物資、弁当とか、おにぎりとか、今ここに向かって運んでいます」

急に私は不思議な感じを覚えた。まもなく中国に戻って家族や友達に会って喜ぶはずですが、私の気持ちはなかなか楽にならなかった。ほかの人のためにずっと貢献している日本人に対して、私は自分の弱点は数えられないほどである。中国で家族といっしょに無事を祝うことと、避難所でみんなといっしょに困難を克服することと、私にとってどちらが自分の内心の喜びなのか、もう分からなかった。

３月18日、地震が起きてから８日目。午後２時にようやく中国への飛行機に乗った。空港で両親からの電話をもらった。まもなく中国に到着することを両親はすごく喜んだ。でも、私は手ばなしでは喜べなかった。なぜなのか、自分でも分からなかった。窓の外の景色はますます後ろに飛び去り、大きな騒音が響いて、飛行機は空に飛び出した。その瞬間、地面に立ち、飛行機に向かってお辞儀をする日本人の姿に気がついた。いつの間にか涙が出ていた。

たぶん人間と動物はもともと同じだ。人間と動物は同じように慌てる。意外な事に対して、どうすればよいかも分からなくなる。同じように弱く、自然の力に対してなにもできない。同じように怒り、被害を受けた時は落ち着かない。同じように脆く、災害に対しての支援が必要だ。同じように利己的で、危険な時自分のことばかり考える。

しかし、日本で経験した事から、私は動物と人間の違いに気がついた。人間は体力的に自然に勝つことはできないけれども、精神的に自然を征服することはできる。

人間は自覚があり、慌てずにすべきことが明確になる。人間は弱くなく、団結力があり一丸となって困難を克服できる。人間は忍耐力があり、いらいらせずに新たな希望に向かう。人間は脆くはなく、責任感があり、助けてもらうだけではなく人を助ける。人間は利己的ではなく、犠牲的精神があり、人を愛することができる。

中国の歴史家は「だれでも死ぬ。ただ、その死は山より重いものと羽毛よりも軽いものがある」と書いている。多分、今、日本での生命は山より重いだろう。

追記：４月28日、私は日本に戻った。新たな目標を抱いて……

2011/3/27　「新聞に載りました！」

2011年3月28日（月）の高知新聞に校長先生のインタビューの記事が載りました！

伝わっていた、日本の心

仙台市中心部で、外国人のための日本語学校の校長をしています。地震では大騒ぎになりましたが、普段から防災訓練には力を入れていたので、11カ国250人の留学生たちには被害がなかった。･･･（中略）･･･安全確認のため14日に学生を集めた際、「あなたたちは日本の言葉、文化を学びに来た。避難先でも『何かできることはないか』と話し掛け、日本人が立ち上がる姿を目に焼き付けてほしい」。そう呼び掛けました。すると、こんなことが分かりました。母国へ一時帰国するのに、いったん新潟へ避難していたうちの学生が、どうやら、新潟の避難所でグループをつくり、積極的にボランティア活動をしていたというのです。また、サウジアラビアのある学生は帰国直前に、学校に電話をかけてきました。そして私に「きょう、帰る」と告げた後、唐突に宮沢賢治の詩を朗読し始めました。

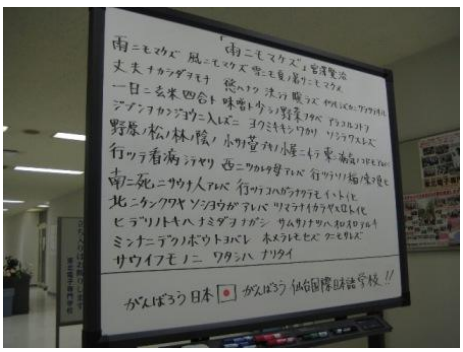
「雨ニモマケズ　風ニモマケズ…サウイフモノニワタシハ　ナリタイ」

私たちを励まそうとしたのでしょうか。普段どこまで留学生に私たちの思いが伝わっているのか、わからないところもある。でも、伝えたかった日本人の心は、ちゃんと伝わっていたんですね。

2011/4/1 「『月刊日本語』のインタビューを受けました。」

本日（4/1）、『月刊日本語』の取材を受けました。『月刊日本語』の編集長である村上さんが、このブログを読んでくださったのがきっかけで話が進み、この取材が実現しました。

村上さんによると、当校の教職員や学生が体験した出来事は、全国の日本語学校で共有し、次の震災時に生かすための大変貴重な情報になるだろう、ということでした。今回の震災における当校の対応は、うまくいった点もあるし、不十分だった点も多々あります。ただ、過去の出来事として風化してしまわないうちに、震災について一緒になって考えるきっかけになればと思い、取材に協力させていただくことになりました。



この他にも、『ソトコト 2011年8月号』（木楽舎）に当校のボランティア活動が、4/7の読売新聞に校長のインタビューが掲載されました。

(無題)

Purja Pun Lalit（ネパール）

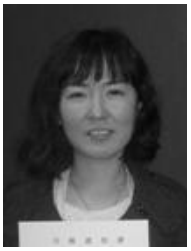
2011年３月11日、日本で大きい地震でした。いままでではじめて、いちばんたいへんな日でした。

そのとき私は学校にいました。地震は私の国にありませんから、びっくりしました。地震のあとで、学生と先生はみんなビルからこうえんにでました。４じにうちへかえりました。でも、私のへやにでんきもないし、みずもないし、ガスもないし、それでしんぱいになりました。どうすればいいですか。なにもかんがえられませんでした。私のともだちといっしょにしょうがっこうへいきました。そのとき日本人といっしょにすわりました。つぎの日のあさ、へやにかえりました。おなかがすいたから、しょうがっこうでおにぎりとみずもらってとてもうれしかったです。そのとき私は、ははのりょうりをおもいだしました。２日あとで、とうきょうにいってともだちのへやにすみました。なにもしませんでした。

それから１しゅうかんあとでかえりました。そのときせんだいはとてもあんぜんでした。へやにみず、ガス、でんきもありましたから、日本人といっしょにがんばっています。

(無題)

宋　美蘭　Song Meilan（中国）



今も記憶に生々しく残っている、私にとっては一生忘れられない事です。それは2011年３月11日、午後２時40分ごろの事でした。

いつもと同じように学校が終わって、アルバイトをしているカーテンの工場へ向かいました。カーテンの工場は海から近いですし、その地域では結構大きい会社でした。通常のとおりにコートを脱いで、３階にある仕事現場へ行きました。仕事をし始めてから10分過ぎた時、突然工場が激しく揺れるのを感じました。地震だと気がついても、地震が多い日本では不思議なことではないと思いましたが、時間が経つにつれてもっともっと強く揺れました。こんな強い地震を感じたのは初めてでした。天井板が落ちるし、機械が壊れる音があっちこっちから聞こえました。また、一緒に働いている仲間たちの泣き声も聞こえてきました。私も不安を持っていましたが、不安ばかり感じていても何もできないと意識しました。突然、私の目に見えてきたのは、隣に置いてある大きい机でした。すぐ机の下に入りました。以前、先生から地震が来た時、机の下が安全だと聞いていたからです。長い時間が経って、揺れも止まっていたので、皆と急いで外に出ました。皆揃っているか、無事かどうか確認してから避難場所へ行きました。４階の建物の中に入って屋上に着きました。でも、私はなぜこんなところまで上ったのか知りませんでした。周りの人からもうすぐ津波が来ると聞かされました。「津波って何？」聞いたことはありますが、見たことがない私は好奇心が強まりました。それで、前がもっと見られる階段に上って前を見ました。

遠い所から何か来るのが見えましたが、はっきり分かりませんでした。でも、スピードが速くて、いつの間にか私の目の前まで来ました。津波は一瞬で、私の目の前の家と車を全部飲み込んで、もっと進んで後ろの方に向かっているのを見て、何も言えませんでした。その高さは10m も超えるように見えました。さっきまであった家と工場

が一気になくなって、それを見た人々は悲しみを隠せませんでした。私もこんなことを初めて見て、夢ではないかと疑いましたが、やはり事実でした。急に外に出たから、コートを着ていなくて寒かったんですけど、管理人が大きいビニール袋を皆に配って、上から着るように言いました。そんなことから、人を配慮する心遣いを感じました。避難場所で一晩過ごして、救助隊が来て私達を安全な場所まで送りました。

地震も震度７で大変強い地震だと感じましたが、それより津波は本当に怖いものだと実感しました。でも、自分が怖いと思った時、お互いに激励しながら助け合う、そのすばらしさを学んで、すごくよかったと思います。

私は誰でも体験できない事にあったと思います。また、今からが大事だと思います。こんな事をきっかけに、前よりもっと頑張って行かなければならないと思います。

本当に強いじしん

Purja Khem Lal（ネパール）

ぼくは去年の 10月に日本へ来た。来たばかりはおもしろかったけど、一カ月あとで、すこしこまった。なぜなら、べんきょうするし、家族をおもいだしたので、せいかつはたいへんだった。３月の 11日のじしんで、もっとこまった。

そのじしんがあったさいしょは、ぼくのせいかつのさいごの日だとおもった。そのおおきいじしんがあったとき、学校にいた。その日は、でんきとか、みずとか、ガスが、ぜんぶだめだったので、ほんとうにせいかつはわるくなった。

じしんのあと、ふつかかん、かぞくにれんらくすることができなかったので、しんぱいした。じしんのあと、かいものもできなかった。だから、わたしたちはしょう学校でおにぎりをたべた。つぎの日はみずものむことができなかったので、日本人のいえに行った。その日本人にみずをもらった。じしんのあと、みんなネパール人はあつまってすんだ。じしんのしあさって、かいものにスーパーで２時間ぐらいならんだ さい、にほんじんのおばさんにあった。おばさんは、とてもやさしかった。

じしんのむいかかんあと、せんだいはたべものもないし、のみものもないし、これからせいかつはたいへんかもしれないとおもって、わたしたちはとうきょうへいこうとおもった。とうきょうへいったさいはゆめだとおもった。そのあとで、とうきょうのともだちのへやにとまった。そのときは、とうきょうもあぶなかったかもしれないので、あんしんすることができなかった。それで、きもちがとてもわるかった。

じしんといっしょに、つなみがきたので、そのときほんとうにこわかった。ひとびともたくさんしんだ。いえもたくさんこわれた。だからわたしはくにへかえろうとおもっていた。

東日本大震災の感想

梁 慧賢 Leung Waiyin（中国）

私が日本に来た時、「日本は大地震があるかもしれません」とずっと聞いていました。突然、地震は来ました。３月11日午後２時46分、私が家でインターネットでメールを見ているとき、地震が起きました。

地震が起きたばかりのときは、すごく弱く揺れていて、「あ、地震だ」と思って、私は全然動きませんでした。いすにすわって、じっとしていました。そして、心の中で「いつ止まるの？」と思いました。でも、揺れがどんどん大きくなって、冷蔵庫や本棚が移動したので、私はつくえの下にかくれました。地震が少し小さくなった瞬間、自分の大切な物を持って、家の外へ逃げました。

その日は、近くの小学校が避難所でしたので、そこで１日過ごしました。その夜はとても寒くて、寝られませんでした。電話もつながらなく、食べ物もなく、とても不安でした。

次の日の朝、食べ物が買いたいと、スーパーに行きました。すごく長い行列になっていたけど、私も並んでビスケット１個だけ買うことができました。みんな大変なので、さわがず並んでいました。

それと、私のけいたいの電池がなくなったので、充電できる所をさがしました。そうしたら家の近くの中華料理店で、充電できました。その店だけ電気があり、困っている人に店を開けて、助けてくれました。すごく感動しました。家族の電話を受けることも出来ました。

日本では、困っている人を、みんなで手伝ってあげて、すごいなと思います。私はこの地震にあった事は、一生忘れないと思います。

１つになろう日本！がんばろう仙台！

全　善花　Quan Shanhua（中国）

３月11日、私が一生忘れない日です。日本に来てから弱い地震にあったけど、今回のような大きい地震ははじめてでした。

その日、私は仙台国際日本語学校にいました。ちょうど学校の休み時間になって、休もうと思ったが早いか、大きい地震が起きてしまいました。私の人生もここまでかと思いました。学校のビルがだんだん強くゆれている時、遠藤先生が来て「皆さん、地震です。早く机の下に入ってください」と言ったので、私たちは机の下に入りました。机の下に隠れた瞬間、目の前で黒板が大きく揺れ、廊下からほかのクラスの生徒の恐がる声が聞こえたり、地震の揺れで建物の揺れる音が私の恐怖心をより強くさせました。10分くらい経ってから、私たちは外に出ました。外から見ても建物が大きく揺れているのが分かりましたが、こんなに大きな地震にもかかわらず日本の建物はとても頑丈で、揺れに耐えているのを見て、中国だったらすぐに建物が崩れてしまうのにと、日本の建物の頑丈さに驚きました。１時間後に私たち生徒は各自避難する事になり、私はまず自宅に帰る事にしましたが、家の中はとても入れる状態ではなく、しかたなく近くの小学校に避難する事にしました。そこはたくさんの被災者で溢れ、夜はストーブが一つしかない教室でとても寒い夜を過ごしました。

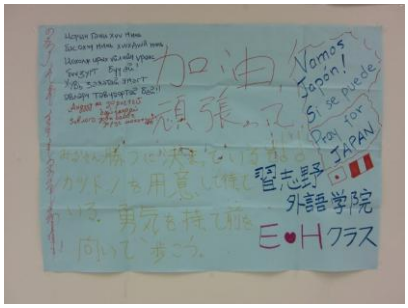
しかし、私は幸運だと思いました。なぜなら、ラジオから流れて来るとても残酷なニュースを耳にしたからです。海沿いの地域では、とてつもない津波が人々を襲い、町を跡形もなく消し去り、その自然が起こした悲劇に私は胸が痛みました。「自然は怒ってしまったのだろうか？もう二度とこんな悲しい事が起きて欲しくない」と祈るばかりです。そして、こんな私にも何かできる事はないか、少しでも日本の復興に役立てる人になりたいと思います。決して日本は終わってなんかいません。私たちのように、こうやって学校に通い、大切な人たちや仲間たちに会うことができ、生かされているとい

う事にとても意味を感じています。その、生かされている私たちにできる事がたくさんあるはずです。私は日本人ではありませんが、日本のすばらしい所をたくさん知っています。たくさんのすばらしい日本人にも出会って来ました。この逆境こそが、より良い日本を造り上げると私は信じています。だからこそ、少しでも貢献していき、また素晴らしい日本が戻ってくるようにみんなで力を合わせましょう。

３月11日、この日を決して忘れないよう、生きて行きましょう。

2011/4/9「習志野外語学院さんから」

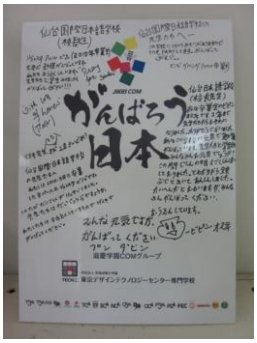
千葉県にある習志野外語学院さんから温かいメッセージをいただきました。同封されていた手紙によると、学生の方から「被災地へメッセージを贈りたい」という要望があり、書いてくださったそうです。また、3/16 には戸田学院長自ら仙台を訪問され、当校にも足を運んでくださいました。



みなさんの気持ちはきっと伝わると思います。本当にありがとうございました。

2011/4/28「卒業生からのメッセージ」

東京デザインテクノロジー専門学校さんにメッセージボードを頂きました。メッセージは当校の卒業生が書いてくれたそうです。卒業しても母校を想ってくれる気持ちがうれしいです！



本当にありがとうございました！わたしたちはみんな元気です！みなさんも勉強、頑張ってくださいね！

2011/5/26「感謝状」

サウジアラビア大使館文化部文化アタッシェのイサム・ブカーリ様が当校まで来てくださり、3/11 の東日本大震災での学生の安全確保に貢献したということで感謝状を頂きました。

このような立派なものを頂き、教職員一同深く感謝しております。早速学校の入口に飾らせていただきました。ありがとうございました。

2011/6/14「義援金」

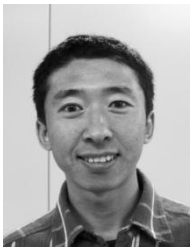
日本語教育振興協会が、被災した留学生や日本語教育機関への支援のため、義援金を募ってくださいました。当校にもその義援金を分配して頂き、本日、学生たちに手渡しました。

義援金をくださった皆様、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

上記以外にも、インターナショナル・スクールオブビジネス専門学校、国際トラベル＆ホテル専門学校、ラ・サール修道会、JaLSA、東北電子専門学校の今野部長をはじめ、多くの皆様より温かいご支援を頂きました。

地震の体験

斉　海軍　Qi Haijun（中国）



３月11日ちょうど地震の時は八幡町にある郵便局に入ってお金を降ろそうとしていたところでした。突然建物が揺れ始めて、地震だとびっくりして外に逃げ出しました。出る時、もっと激しく揺れました。急いで大きな道路に着くと、立っていられないほど揺れて、道の側にある電柱に靠れて立ちました。まだまだ揺れが止まらなかったので、後ろにある建物が落ちて来るかなと思って、道の真ん中に立ってみました。その時、道路を走っていた車が全部止まりました。そのあと揺れがだんだん弱くなりました。私が道の向こうに行ってちょっと待つと、揺れがまた強くなり、しばらくどうすればいいか分からなくなりました。揺れている時、私はもうそのまま死んでしまうかなと思いました。揺れに驚いた人々が泣いたり叫んだりしていました。揺れによって電気が止まり、電話も通じなくなりました。地震の後に余震がたくさんありましたので、取りあえず、家が安全かもと思って、家へ行きました。家に着くと近所から出てきた友だちと近所の日本人は地震のことばかり話しあっていました。そのあと、ぐちゃぐちゃになった家から必要なものを持って友だちと一緒に避難所へいきました。

４月７日の夜、大きな余震がありました。その時、私は大阪に避難していました。ニュースによると仙台市は震度６だったそうです。まだみんなおちついていない上に、こんなに大きな余震が来るんだって、本当に落ち着いてない心がもっときびしくなったかもしれません。でも余震のあと、つなみがなかったのは、すごくよかったと思います。今回の余震の揺れの強さは前回（３．11）と同じぐらいだそうですが、前回はこのような揺れがずっと長く続いたということでした。１時間ほどニュースを見ていましたが、眠くなったので寝ました。

私にとって４．７の余震は３．11の地震より怖いと思います。余震の後、何もする気持ちがなかったんですが、余震が1年も続く可能性があるので、現在の状況になれて、勉強と生活を続けなければならないと思います。３．11の大地震と４．７の余震で、幸いに皆さんが無事だったことは何よりです。

日本でわすれられないけいけん

Bhattarai Mani Prasad （ネパール）

私は半年前日本へ来ました。2011年３月11日午後２時46分、私ががっこうのコンピューターの部屋でインターネットを使って、ネパールの友達にメールをかいている時、とつぜんじしんがあって、ビルがゆれてしまいました。日本に来たあとで、すくないゆれをけいけんしていましたから、まずはだいじょうぶだったんですが、ゆれのスピードははやくなりましたので、こわかったです。先生たちはみんな学生たちに「つくえの下に入れ」といったので、私もつくえの下にはいりました。ゆれのスピードはもっともっとはやくなったので、とってもとってもこわかったです。その時神様をおもって、たぶん今日がじんせいのさいごの日だとおもいました。だいたい３分ぐらいあとで、しんど７のじしんは少しおそくなったのでビルからにげて、ちかくの公園にあつまって先生たちのはなしを聞いて家にかえりました。

部屋はだんすいしました。ガスもないし、ていでんにもなりました。じしんのニュースを聞いて国で家族は心配だとおもって、なんかいも電話したのにできませんでした。みんなともだちといっしょに、ちかくのちゅうがっこうに、せいかつのために行きました。そこでもらった一本500ml の水と、一つおにぎりをたべて次の日までそこにすみました。ガスもつかないし、水もないし、電気もないので、子供のとき、ちゅうがっこうの本に書いてあった昔の世界のことを思い出しました。ビンをとって、水のためにいろいろなところにいきました。インターネットもないし、けいたいの電気ももうおわったのでいろいろな新しいじょうほうとか電話ももらえなくなりました。毎日のせいかつのために、いる物とか食べ物がぜんぜんないので、ほんとうにとてもたいへんでした。

じしんの四日ご、水とか電気がついたのでせいかつが少しべんりになりました。ガスがないので、少しのこっているたべものを、つぎのひのためにかんがえて、少し、少し、ご飯とかカレーをすいはんきでつくって、毎日１回だけたべました。じしんとかつなみ

で、ふくしまのげんぱつがこわれたので、原発とかつよいじしんになるかもしれないので、ともだちはとうきょうに行きましたが、私は仙台に残りました。がっこうからもらった米とか、ともだちからもらったたべものを、たべて家で毎日ニュースをきいていました。

ニュースで「そんな強いしぜんさいがいの場合、世界で日本はいちばんじゅんびできた国だ」ときいて安心して日本人といっしょに仙台にのこりました。日本は強い国、日本の力をしんじて、じぶんのしょうらいのために、勉強のために日本へ来ましたので、日本人といっしょにいっしょうけんめいがんばって、今まで仙台にいます。

がんばろうみんな。がんばろう仙台。がんばろう日本。

日本大地震中の私たち

王　雪嬌　Wang Xuejiao（中国）

３月11日、太陽が依然として大地に照らして、さくらも咲いていた。季節が循環するのは自然だ。昼ご飯を食べた後、ちょっと寝ようとしていた時、部屋が強く揺れた。「あら、地震だ」と思ったが、頭がぼんやりしていて、どうしようかわからなかった。何秒か経った後で、机の下に潜り込んだ。

その時に、へやが大丈夫かなあとか、今は死にたくないとか、いろいろなことを考えた。今回の地震は５分ほどだが、私にとってまさに１世紀のような時間を過ごした。そこで、一番早いスピードをもって出かけて、近い避難所に行った。携帯電話で調べたニュースを見た時、びっくりした。東日本太平洋側で起こった大地震で、マグニチュードは９だ。うそだと思ったが、自分の目が自分を騙さない。

地震のせいで家が倒れたり、人が生き埋められたり、にぎやかな町はあっという間に廃墟になってしまった。そして、大地震は津波を引き起こして、黒い水が悪魔のように人を呑み込んだ。被災状況がもっと厳しくなった。今でも、ニュースを見るたびに、私は心が痛くてたまらない。

しかし、日本人の粘り強さと高い素質に感服した。避難所の中は黒山の人だかりだったが、日本人のチームワークがよく現れた。若者は自分がもらった布団を子供とお年寄りに譲ったり、男性も主体的に女性にサービスしたりした。

これだけではなく、日本人は避難する時に、順番によって一列に並んで外に出る。私はしみじみと感心させられた。たとえ、今の日本はパニックに陥っても、日本人はあきらめない。今、全世界は日本の放射能汚染のせいで、本当に心配しているといっても、政府は全力で救い出している。日本国民が一生懸命恐ろしさを抑えたからこそ、政府はストレスをかけられないで、没頭することができる。

私の友達や学校の先生や学生なども無事でよかったと思っている。

今回の地震は私にとって大切な経験で、いろいろ考えた。人生の中でこんな経験があるのは悪いこととは限らない。命が一番重要だろうか。今回の地震も日本の日常に見えない国民性を感じる一番いいチャンスではないか。

災難は情けがなくても、人間は冷たくない。私たちさえもっと頑張れば、必ず美しい国に戻れる。私たちは互いに手を握って、心がつながって、協力して、いっしょに平和な日にいこう。

なんで

Shrestha Nabin （ネパール）

2011年３月11日は、わすれがたい日になりました。私のせいかつで、はじめてだいちがゆれるけいけんでした。せかいで、いままででいちばん大きいじしんでした。

２時46分、私は学校にいました。休み時間でした。かならずきんようびの休み時間のときは、学校でそうじがありますので、私たちはきょうしつをそうじしていたのです。じしんがおきた時、とってもこわくてびっくりするかんじでした。それは私のさいごのときとかんがえていました。とってもこわかったから、父のことをかんがえて、めからなみだがでてきました。

父が「日本へ行かないで」といいました。「なんで私は日本へきましたか」と、こころからかみさまにきいて、もうなみだをながしていました。

それからたいへんな時間が私のせいかつにはじまりました。そのことはわすれないように私のこころにずっとおいておきます。

私は信じます

鄭　勲 Zheng Xun（中国）

私は仙台国際日本語学校の留学生です。3月11日、私は一生の中でも、有難い経験をしました。その日は他の日と同様に春の日でした。私は午後の授業なので、午後だけ学校にいます。休み時間、私は友達といっしょに2階喫煙室に行きました。煙草を吸っている時、校舎が揺れるのを感じました。でも、たいしたことではないと考えてずっと吸っていました。5秒ぐらい過ぎると、急に建物がすごく揺れてしまいました。地震は3分くらい続いていたが、私は外から学校の建物が揺れるのを見ていました。初めて経験する大きい地震で、私はどうしたらいいか分からなくて、ぼんやりしてしまいました。学校の友人が心配になりました。もしも建物が崩れれば、その被害は想像することができないほど大きかったでしょう。ですが、そのような不幸は実際には起きませんでした。

3月12日、13日、14日。地震という恐ろしい自然災害とともに、私の留学生活も暗黒の中に陥って行きました。ガス、水道、電気が断たれたことと余震の影響で、人々は皆安全な小学校や中学校に行きました。避難所は多くの人々で埋まっていました。その光景はあたかも戦争が起きたようでした。余震はずっと反復していて、心は不安になっていました。そのような険悪な環境でも、誰も騒いだり、席を取ったりしていないようでした。あるお母さんは子供二人を連れて来ましたが、12時を越えて子供が寝ついてもずっと目を開けたまま子供たちを守りました。余震が来るたびに、お母さんは自身の中で赤ん坊をかばって軽く叩いてあげました。その瞬間のご両親の気持ちを考えると、胸が痛くなりました。私は、そこで人々の美徳とその道徳性に感動しました。

3月15日。私は仕方がなく、しばらく帰国することになりました。心の片隅では嬉しかったのですが、心の片隅では申し訳ない気がしていました。日本に留学している学生として、困難を共に勝ち進むことができない自分自身が恥ずかしかったのです。私は日本が1日も早く元の状態に復帰するよう願っています。そして、信じます……。

日本頑張ろう、仙台頑張ろう、仙台国際日本語学校頑張ろう。

2011/4/21 「お花見（SAKURA）」

今日は待ちに待ったお花見。 ここ2日間は寒い日が続いたのですが、今日は快晴。絶好の花見日和。

いざ、出発！ 近所なので、散歩がてら歩いて移動。 花見の名所、榴ヶ岡公園に到着。会場の用意も万全。 食べ物もどっさりありますよ。

行儀よく座って、初めて食べる柏餅のお味は？

大満足のようです。きれいな桜の木の下でみんなといっしょに食べると、おいしいですよね。

食後にネパールの学生がダンスを披露してくれました。楽しく歌って踊って大興奮！

続いてはみんなでビンゴゲームです。
授業中にはない集中力！

ビンゴ～！ 炊飯器ゲット！ 当たった人から好きな景品を選んでいくのが、仙台国際式。この他にも、サッカーのユニフォーム、ベルト、本、ゲームなど豪華景品盛りだくさんでした。

最後は、みんなそろって、はい、チーズ！
明日からも勉強、頑張りましょう！

一生忘れないこと

趙　雪美　Zhao Xuemei（中国）

今回の東北関東大地震は私の一生忘れない事です。３月11日午後２時46分、私が家でテレビを見ている時、テレビで地震速報が流れて来ました。私はすぐ終わるかと思いましたけど、だんだん強くなりました。友だちがとなりの部屋で寝ていました。私はすぐに友だちの部屋にいくと、友だちは私に「早く机の下に来て」といいました。

地震の後、私は部屋の電気をけして、パスポート、財布、お菓子、厚い服、傘などを持って外に出ました。管理人は「はやく避難所に行ってください」と大きい声で言いました。私たちは荷物をもって避難所へ行きました。夜７時ぐらいに避難所で一人一つお菓子をもらいました。突然、中国の家族のことを思い出して、けいたい電話で何回も電話しましたが、通信できませんでした。15回目に通じて、母と電話しました。母が涙を出しながら私に話をした時、私も涙が出ました。私の友だちも隣で涙を出しました。とても悲しかったです。

次の日、私は家にあるお菓子を持って、友だちがいる別の避難所にいって、お菓子をあげました。友だちがいる避難所は私の避難所より、もっと人が多いし、食べ物もなかったです。

何日かすごして私は帰国しました。一か月ぐらい休んで、５月２日に仙台へ帰りました。９日、学校へ行って先生からボランティアの活動があるという話を聞いた時、私はぜったい行きたいと思いました。

神さまをおもいました　３月11日

Pun Del Bahadur（ネパール）

ぼくは仙台国際日本語学校の学生です。３月11日午後２時46分、私が学校の七階で授業の時間の後でそうじしている時間、地震が起きました。はじめのとき大きい地震だから、はじめはたのしかったです。でも、じしんがながかったですから、１分後でほんとにあたまで「たぶんしにます」とかんがえました。このじかんに、かみさまをあたまのなかでおもいました。そのとき、こわかったから、ぜんぶわすれました。でも、だいたい３分あとで、じしんがとまりました。たぶん「かみさまがてつだいました」とおもいました。

たぶん５分あとで、みんながくせいとせんせいはあつまりました。そのときも、なんかいもおおきいじしんがありました。まだ学校のちかくにいるのに、私はこわかったたから、なにもできませんでした。20分あとで、みんなは部屋にあるいてかえりました。でも、おおきいじしんでしたから、部屋のでんきとみずとガスもないから部屋にすむことができませんでした。

11日の夜はパスポートとたいせつなものをもってアパートのちかくにあるしょう学校にいきました。でも、しょうがっこうにも、ひとはたくさんあつまりましたので、すむことがほんとうにむずかしかったです。そのときも、なんかいもじしんがおきましたから、ほんとにこわかったです。

12日の朝、みんなともだちがあつまってそうだんして、かいもののために、みせにいきました。でも、かいもののために、ひとがたくさんいるので、たぶん３時間ぐらいならんだのに、にもつはほんとにすこしだけかいました。

３月13日の日に、ともだちの部屋にガスだけでましたから、だいたい 15人ともだちがあつまって、いっしょにご飯をつくってたべました。11日からずっとたぶん 13日まで電話ができなかったから、かぞくはしんぱいしたので、なんかいもかけたのに、できま

せんでした。

３月14日の９時に、学校のまえにあつまって先生たちとそうだんして部屋に帰りました。でも、強いじしんだったのに、学生と先生はぶじだったから、ほんとうにうれしかったです。

３月16日に、じしんがまだあぶないとかんがえたから、だいたい40人のネパール人はとうきょうへいきました。そのときは、すこしあんしんしました。でも、ぜんぶ日本はじしんであぶないから「どうすればいいですか」そのことばについてそうだんしました。だいたい７日間ぐらいとうきょうにすんだあとで、すこしあぶなくなかったから、もう仙台へ帰りました。でも、いまもじしんであぶないのに、ぼくの学校は、だいじょうぶです。がんばろう学生。がんばろう仙台国際日本語学校。

日本頑張ろう　仙台頑張ろう

金　元星　Jin Yuanxing（中国）

今回のじしんはわたしの一生でわすれないことになった。

３月11日午後２時46分、やすみじかんだった。学校の喫煙室でたばこをすって、たったいま教室にはいったばかりだった。わたしの席にすわろうとしたしゅんかん、なんかゆれているかんじがきた。友人と「じしんだ」といったとたんつよくゆれてきた。一しゅんにおきたことだからなにもかんがえられなかった。まえとおなじようにすぐおわるとおもったのにぜんぜんとまらなかった。学生たちとかたをよせて、かみさまにぶじにのりこえられるのをおねがいした。自然災害はどんな人でもしかたがない。運に預けた。なん分あとかな、とまるかんじがあった。そのとき先生は、「１階ににげてください」といって、わたしたちはとびだして教室を出た。学校のまえの公園に学生と先生たちがあつまった。先生が学生の名前をよびながら安全についてかくにんした。全員ぶじに元気だった。ほんとうによかった。

そのあとともだちといっしょにうちにかえってこれからどうするかをかんがえてみた。ほとんどは、「ほかのところにいきたい」といった。でも、じしんのために交通も不便だし、わたしは日本にいるしんせきもいないし、どこにもいくことができなかった。仙台にのころうときめた。

よくじつ、生活用品がほしかったのでスーパーにいってみたのに、営業中のみせがみえなかった。しかたがなかった。ざんねんなきもちだけもってうちにかえった。でもうちは水もすこしずつでるし、でんきもつかえた。他人にくらべるとわたしはほんとうによかった。両親からはまいにちなんじゅっかいもでんわがきて「くにへかえりなさい、あぶないから。外国でニュースをみるとほんとうにたいへんだ」といわれてなやんでいた。そしてわたしに「きこくしなくてもいい。げんぱつじこがあるところからとおいところに行きなさい」といった。

1週間後東京にいった友人からでんわがきて「東京にきて、わたしのあにのいえにちょっといてから再び仙台にかえろう」といった。さびしいし、たべものもたりないし、たいへんだったのでいくようにきめた。よくじつバスとしんかんせんなどいろいろな交通手段をしらべてみた。ひとつの方法しかなかった。とりあえず山形にいって山形から新潟までのバスにのりかえて、また新潟からつるおか行のバスにのりかえ、そこからしぶや行バスにのるのだった。ほんとうにたいへんだった。運転手さんから水もおかしももらってほんとうにありがたかった。こうして横浜に到着した。友人がむかえにきた。うれしかった。いっしょに友人のおにいさんのいえへいった。うちをぬいて他人のいえにすんだことがなかったのではずかしかった。おもいに反しておにいさんがほんとうにやさしくはなして、おもかったわたしのきもちもかるくなった。そこでも余震をよくかんじた。でもみんなといっしょというおもいで全然こわくなかった。こうして1日1日をすごしているところに先生からでんわがきて始業式がきまった。うれしくてはやくかえりたかった。4月3日、仙台にもどった。ほとんどふっきゅうされた。生活用品をたくさんかってうちへ行った。たのしみにくらしていた。4月7日23時30分ごろシャワーをして浴室からでたばかりだった。またつよいじしんがきた。下着をきたままそとにとびたした。友人にすごくわらわれた。3月11日の地震を経験したのであまりこわくなかった。

こうしていろいろなことがほんとうにしあわせなのをもっとよくかんじた。

日本のみなさんいっしょにがんばって力をあわせてたすけながら立ち上がりましょう。

日本がんばろう、仙台がんばろう。

かならずおぼえる日　３月11日

Acharya Pramod Prasad（ネパール）

３月11日2011年午後２時46分。この時に、仙台みやぎ県でせかいでいちばんおおきいじしんがありました。そのあとでひどいつなみがきたので、おおい日本じんがしにました。とてもざんねんです。

じしんのときに、私はやすみのじかんだったので、コンピュータのへやでインターネットを使っていました。最初私はたのしかったです。あとでいすのしたに、とまりました。長くじしんがつづくので、あぶなくてしんだとおもいました。かみさまにおいのりをして、りょうしんをおもいました。学校のたてものが、たおれるとおもいました。でもたてものはつよいですから、ひとがしにませんでした。

じしんのあと、たいせつなものがありませんでした。水もないし、電気もないし、ガスもなかったのでとてもこまりました。おおきいじしんのあとで、ちいさいじしんもつづきました。今でもちいさいじしんがあります。あのときに日本じんといっしょに、しょうがっこうにとまりました。日本人といて、じしんについてきもちがかわりました。みなともだちと日本人がいるので、さびしくなかったです。りょうしんにでんわをして、あんしんしました。かぞくから「しんぱいしないで」と言ってもらいました。たいせつなもの、たとえばパスポート、がいこくじんとうろくしょう、のこりのおかねをあつめておきました。しょう学校でおにぎり、みず、おかしをもらってうれしかったです。

月曜日学校へ行って先生の話をききました。先生はちかくのしょう学校へいってくださいと言いました。

じしんのだいたいいっしゅうかんあとで、みんなネパールじんはとうきょうへ行きました。ネパールのたいしかんに、てつだってもらいました。とうきょうでみんなネパールじんは、いっしょにすんでいましたから、たのしかったです。日本にすんでいるひとが、てつだいましたからぜんぶむりょうでした。

だいたいいっしゅうかん、とうきょうにとまったあとで、仙台(せんだい)へかえりました。アパートにガス、でんき、水(みず)があるのでうれしかったです。でもスーパーで、ものがあまりないので、ものをかうのにならばなければなりませんでした。それからだんだんいい日(ひ)がつづいています。よかったです。

2011年３月11日（午後14時40分ぐらい）

李　玉明　Li Yuming（中国）

今日、私の人生で初めての怖いことがありました。

私は午前のバイトを終わって学校に行く途中でした。突然半年前やっていた工場の社長から電話があって、私にいろいろ聞いて、最後に「リさん午後工場に来ることができるか」って聞きました。私が「今日だけ」って聞いて、（社長は）「うん、今日だけ」って答えました。それで私はすぐに仙台駅に行って、電車に乗って東塩釜に向かって行きました。

１時半ぐらいに東塩釜に着いて２時から仕事が始まりました。２時から仕事が始まって 40分ぐらい仕事して多分２時40分ぐらいの時間に怖いことが起こりました（９．０地震）。あの時私はひとりの日本人と外で仕事していました。突然その日本人の携帯電話が鳴り始めました。そしてその日本人が「リさんメールだよ」って言いました。私は「違います」と答えました。その日本人の携帯電話の鳴った原因は地震がきたからでした。私が「違います」って言ってすぐに、社長さんお宅のガラスがパッて破れました。続いてお宅の隣の木とかも揺れ始めました。その時あの日本人が「地ー震」と呼んで広い道に走って行きました。私も後ろに付いて行きました。そして工場の中にいた人達も付いて出て来ました。その後にみんな一緒に山の上まで登って行きました。山の上に行って午後の15時ぐらいから18時ぐらいまでそこで待っていました。19時ぐらいまで山の上にいて社長のお宅に行きました。帰ってみんな一緒にご飯を食べたり、話したり、22時ぐらいになって寝ました。その時にも地震がどんどん来ていました。

社長のお宅に２泊泊まって私は自分の社長から自転車を借りて仙台に戻ってきました。

2011/5/1

「Sendai International Volunteers' Diary 」

「先生。ボランティアをしたいんですが、どうしたらいいですか？」とある学生に聞かれた。それがきっかけで仙台国際ボランティア部の活動は始まった。

4月21日(木)

午前中、榴ヶ岡公園で花見。解散時に、参加者を募る。 メキシコ人の学生2人が、自分たちの所属するラ・サール会から車や食糧、長靴を提供できると言ってくれた。ホームセンターで長靴、ゴム軍手、レインコート、マスクを購入する。

4月22日(金)

朝、メキシコ人の学生が、長靴、食料などを持ってきてくれた。ボランティア活動に参加を希望する学生全員にボランティア保険の申込書を書いてもらう。

4月27日(水)

参加希望者を授業後、教室に集め、当日の予定、服装、持ち物について説明した。最後に、「あなたたち一人一人が、自国の代表だと思って、作業だけでなく、あいさつやマナーに気をつけてほしい」と伝えた。

4月30日(土)

快晴。集合予定の8時45分までに、ほぼ全員がそろう。教員を含め、8人。車2台でボランティアセンターに出発。

9時25分、ボランティアセンター到着。すでに建物の中は参加者でいっぱい。G・Wということで、全国からボランティアの方々が駆け付け、普段の3倍ぐらいの人が集まっているとのこと。

10時。依頼が来るのを待つ。個人・グループを含め、100人ぐらいが待機している。「12時まで待って決まらなかったら今日はあきらめて帰ろう」と学生たちに伝えた。

11時30分、ようやく仕事が決まった。作業に必要な道具(スコップ、一輪車、ラジオ、応急治療セット)を借り、簡単に食事を済ませ、12時にボランティアセンターのバスで出発。

若林区の依頼主のお宅の庭で、津波で流されてきたガレキの撤去作業にとりかかる。最初は慣れない作業に悪戦苦闘し、一輪車をひっくり返したり、スコップでうまく泥をすくえなかったりしたが、徐々にさまになってきた。順調に作業は進んだが、かなり広い庭だったので、到底全部片付けることはできなかった。だが、作業していた範囲はだいぶすっきりした。活動終了時刻の 15時、バスの集合場所へ向かった。

バスに乗り、体育館へ。乗った直後は、お菓子を食べたり、おしゃべりをしたりしてリラックスしていたが、体育館に着くころには、疲れたのか眠そうにしていた。解散する前に、学生たちに今日の感想を聞いた。「よかった」、「もう少し長い時間したかった」、「仕事をしながら日本語で会話ができ、勉強にもなった」と概ね好意的な感想だった。

命の大切さ

玄　雪香　Xuan Xuexiang（中国）

地震以降もう２ヵ月経ちましたがまだ思いだすと私がそんな経験をしたとは信じがたいです。今までテレビでほかの地方で地震があって大勢の人が死にましたと放送しても“あ～地震か、かわいそう”これくらいでした。今回大地震を体験してこれはどんなにこわくて大変なことだと言わざるをえない事です。

３月11日午後、私はその時アルバイト先でバイトしていました。２時46分ごろ、私は揺れているのを感じて隣の人に“地震だ”と言うが早いか大変揺れてきて何回も転びながら外に出てきました。外も混乱していました。人々は全部道端にしゃがんでいて“どうする、どうする”を繰り返していました。日本人は小さいころから予備訓練をしていても多分本当の大地震にあった時焦って頭も真っ白になると思います。でも中国で地震を経験した事もないし予備訓練と言ってもこの学校で１～２回だけの私達留学生にとって多分皆パニック状態だったと思います。すぐに終わると思ったら次々と揺れていました。何もできなくてただこわがっていました。何分も続いた地震の後、前が見えないぐらいの大雪が降り始めました。もう仕事ができなくなって皆着替えをして帰ることになりました。私も家に帰って安心しているところに友達も家に帰ってきました。“何してるの？早く避難しないと”家も道も大丈夫なのに何で避難するのと思いながらも友達と近くの小学校に行きました。私の考えが幼かったです。小学校は避難するために混雑しました。そしてほかの人から津波があって海の一面は全部流れてしまったと聞きました。電話もできないしただ避難所で待つしかありませんでした。その時、国にいる家族の事が心配になりました。今テレビで日本の地震について放送しているはずでした。家族皆きっと焦っているはずでした。早く私が大丈夫だと伝えたかったです。体育館で待ちながらずっと家族に電話をかけてみました。そして10時ごろ電話が通じました。私の声を聞いたお母さんは泣きました。“避難所にいるから心配しないで。けが

もしてないし家も崩れなかったよ。仙台市内にいるから津波もないよ”と家族を安心させるように言いました。けどきっとすごく心配しているはずでした。

何日も避難所で生活しました。水も電気もまだ使えませんでした。新聞で津波で流されたところを見て心がくるしくなりました。家族をなくした人々の悲しさを感じました。早めに回復して前の暮しを続けてほしいです。私達はこの地震で失ったものもありますが得ることもあります。心強くがんばって生きる事です。これからこんな悲劇が起こらないように祈りたいです。人間一人一人が大切ですから。

一生忘れられない日

鞠　佩倫　Ju Peilun（中国）

人の一生の中、いろいろなことが発生します。楽しい事、悲しい事。その事はいつも準備がない時突然発生しています。

自然災害の前に１人のちからはとても小さいです。あの初春の午後。3月11日午後２時40分。授業がもう２つ終わりました。次の授業から初級の修了テストの予定です。みんなはいつもと同じにテストについて準備します。私と友達は学校の２階の吸煙室にいました。たばこを半分吸った時、突然ビルが激しく揺れました。その時２階の先輩たちは「地震です」といって、１階へ走りました。学校の前の小さい公園に集まりました。私たちは公園に立ってビルを見ます。ビルは目で見られる幅で激しく揺れます。たぶん３分ぐらいの揺れのあと７階の先生と学生たち公園に来ました。先生はみんなに「地震後なにをしますか」についての経験を教えました。

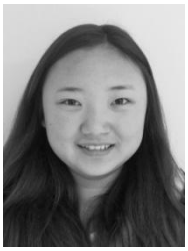
夜部屋に帰りました。もう 12時ですが眠気が全然ありません。時々余震が起きますからみんなとても心配で寝られません。その時ガスが爆破する可能性があるのでガスや電気や水道を全部やめました。その時、何の資源もありません。近所の方が「避難所へいったほうがいいですよ」。それから友達と一緒に避難所へ行きました。避難所の中には大勢人がいます。その夜寝たか寝ないかのうちに起きました。次の日の昼、部屋へ帰って外国人登録証、財布、食べ物などを持って、小学校へ避難しました。夕方、避難所の人から水やお菓子をもらいました。１週間の時間、ずっと避難所にいました。昼は「地震後何をしたほうがいいですか」について聞きました。夜すこし眠りました。また避難所には水も食べ物もありました。避難所では１日に 500ml の水が１本、おにぎりが１つでした。少ないけど、生きるのに十分です。そのような１週間に渡りました。先輩から「早く大使館に連絡します」と聞きましたから大使館に連絡しました。大使館の人は「中国の留学生は中国に帰る避難の可能性があります。」それから新潟へいくバスの

時刻を教えました。次の日私と友達は一緒にバスで新潟へ行きました。新潟に到着しました。新潟の体育館の避難所で３日待ちました。第４日新潟から哈爾濱までの航班（*フライト）がありました。夜８時。飛行機が起程（*出発）します。たぶん夜12時哈爾濱に到着しました。次の日ふるさとに帰りました。家族のみんなは安心しました。

この事件。一生の珍しい経験です。自然の前自分の力は小さいです。でも誰も１人じゃない。みんながいる。心の絆で結ばれているから。立ち上がってください。自分の能力で別の人をてつだってください。

３・11

元　慧丹　Yuan Huidan（中国）



３月11日、日本で大きい地震がありました。特に、宮城県、岩手県、福島県では大きな被害を受けました。

私は仙台市に住んでいます。午後14時46分、地震発生時、仙台国際日本語学校で勉強していました。大きな揺れが続いて、本当に恐かったです。

５分ほど長く揺れて、先生たちは学生たちを心配していました。学生たちは先生たちが言ったとおりに、みんなつくえの下に避難していました。地震が止まって、先生たちは自身の危険を思わず、先に学生たちを外に出させて、最後に７階から逃げました。留学生たちは、本当に心をこめて、仙台国際日本語学校の先生たちに「ありがとう」と言いたいです。

３月14日、留学生と先生たちは学校の前に集合しました。学生たちに会って、私はこう思いました。「大変な時、みんな生きていて、一緒に頑張って、良かった」

地震のあと、何日間も、電気もないし、水も出ませんでした。一番大変なのは、寝る場所がないこと、食べ物がないことでした。でも、もっと大きな震災を受けた人たちを思うと、頑張る気持ちになりました。

地震のせいで、家族と連絡がとれませんでした。家族はニュースを見て、心配したでしょう。地震から４日後、電話がつうじました。家族に電話して、「大丈夫だよ」と言いました。

今度の地震では、いろいろな問題を考えました。日本人の頑張る気持を見ると、中国の留学生たちは、感動しました。仙台にいた留学生は、日本人と一緒に今度の地震を過ごして、一緒に頑張りたいです。

自然災害は恐いですが、津波も恐いです。津波で大勢の人たちが命を失いました。でも、生きている日本人と手をつないで、日本の新しい様子を迎えましょう。日本を信

じている、日本はきっと大丈夫になります。

今、学校の授業は始まりましたが、でも学生はすくないです。私たちは、前よりもっと心をこめて、先生たちと一緒に頑張っています。

今度の地震は、私の人生にとって貴重な経験になるはずです。これから、もっと日本人と一緒に大変な生活を過ごしたいです。

がんばろう日本、がんばろう東北、がんばろう仙台、がんばろうみなさん！

地震

蔡　錦錫　Cai Jinxi（中国）

2011年３月11日は、日本人、学校、日本にいる人、私たち、私……、みんなにとってひどい大変な日でした。日本で震度７ぐらいの地震がありました。初めての大変な体験でしたが、また、いろいろなたくさんの事実を知りました。

2011年３月11日、普通の日のように太陽もあるし、雲もすくないし、いい天気でした。私はいつもと同じような生活をして、ごご学校へ行きました。２時46分、休み時間でしたからコンピューター室にいました。その時ビルがゆっくり、そして大きくゆれました。「地震！！！」先生の大きな声を聞きました。「つくえの下に入りなさい」といったので、私はつくえの下に入りたかったですけど、入る場所がありませんでした。それでつくえの前にすわっていました。その時、両手が私の脚をつよくにぎりました。また、なき声を聞きました。みんなこわい気もちでした。普通の日はその時間は短いのですが、その時の私たちにはどのくらい長い時間、シーンだったのでしょう。ゆれが止まってから外へ出ました。あちこちから「大丈夫、大丈夫」という声をよく聞きました。よかったです。みんな大丈夫でした。でも私は心配しました。私の彼女はほかの学生の部屋にいたので、その方面に速く走っていきました。突然雪がたくさんふって、道に迷うようでした。今日は普通の日じゃなくて、異常な日……。いろいろな問題を考えながら到着しました。みんな大丈夫だったので、やっと少し笑いが出ました。

それからも大変でしたけど、いろいろな日本の強いところを自分で見ました。そのじょうきょうですけど、電話をかける時、買物をする時、ガソリンを買う時……、みんな列にならびますので、じいしきが強いと思いました。世界中のみんなが勉強することです。

後も地震はずっとありました。げんぱつ事故もあったけど、外国人で残った人は日本人と一緒で、日本を心から信じられますから国へ帰りませんでした。

日本はちいさい国ですけど、世界で強い国です。地震の前、いま、その後も日本は同じように強い国ですから、ぜひ早くよくなってほしいと思います。

がんばろう日本！

最後に、亡くなられた皆様のご冥福をお祈りいたします。

わたしは生きる　３月11日

Pun Suresh （ネパール）

2011年３月11日２時46分。わたしが学校の部屋をそうじしている時、おおじしんが起きました。はじめはすこしすこしゆれておもしろかったです。でもだんだんおおくおおく揺れているのでつくえのしたへいって「きょうわたしはしにます」とおもいました。そのときみんなにもわかりませんでした。４分ぐらいずっとゆれてとまりました。そのあとみんな先生たちと学生たちはこうえんいって、いろいろなことを先生たちはいいました。

私は３時30分ごろに家に行ってへやをみてびっくりしました。テレビとかいすとかすいはんきはぜんぶたおれていました。へやにはガスもないし水もないし電気もないし、その時とってもたいへんでした。その日のばんは１つのカップラーメンをたべました。私がすんでいる家はあぶないとおもって中学校に行きました。みんな日本人はその中学校にあつまってラジオをきいていろいろなことをはなしていました。中学校で30分、１時間にじしんでゆれてみんなこわかったです。ともだちといろいろなことをはなしてねませんでした。中学校でみんなに水とおにぎりをもらいました。はじめておにぎりをたべました。じしんで水とかたべものとかなにもありませんでした。みんな日本人はバケツとかペットボトルとかいろいろなものを持って水をさがしていました。その時アフリカ人をおもいだしました。たべものがないのでとってもたいへんでした。たべものをさがしていろいろなスーパーとコンビニへいってもビールとチョコレートだけありました。これはわたしのせいかつでとってもたいへんなときでした。でもいままでがんばっています。

じしんのときどうするか、はじめてばかりなので、どうすればいいかわからないのでとってもたいへんでした。しんど７のじしんでもわたしはげんきで、それで、わたしはうれしいです。みんなでがんばればなんでもできます。それでみんなせんせいたちとがくせいたちがんばればなんでもできます。

2011/6/12

「Sendai International Volunteers' Diary#7」

8:45 予定通り仙台駅集合。JR仙石線で小鶴新田駅へ。

9:10 小鶴新田駅から歩いて5分。VC に到着。東京の留学生ボランティアグループ「Volunteer for Japan（以下VFJ）」の5名とも合流。今日も東京から駆けつけてくれた。新規参加者の登録、手続き等を済ませ、仕事を待つ。このような時間も学生にとっては、日本人や国籍が違う学生らと会話をする良い機会。「この言葉はあなたの国では何と言いますか？」といった質問が飛び交っていた。

10:50 なんと 70人という大きな仕事が飛び込み、すぐさま挙手。他の4つの団体と組むことになった。

11:30 VC の職員から諸注意や作業内容の指示を受ける。70人という大きなグループだが、70人が一緒に動くわけではないらしい。広い活動場所で、基本的には私たち日本語学校と VFJ メンバー計19名での活動となるようだ。15分後、道具をバスへ詰め込み、出発。

12:20 作業場所に到着。各グループの仕事内容を分担。私たちはがれきやごみの撤去となった。仕事の前に昼食。腹が減っては戦はできぬのだ。

12:40、ようやく作業開始。畑には高さ 7～8m はあったであろう松の木がごろごろ転がっていた。私が小枝をまとめて運ぶ傍ら、学生たちは勇猛果敢にその大木に挑む。この日の彼らの合言葉は「ミンナデヤレバ、オオキナチカラニ！」。彼らにもあの CM は刷り込まれていた。

15:00 作業終了。今日はいつになく暑かった。それもそのはず、最高気温は 26℃。それでも、学生たちの働きっぷりに、周囲の方からお褒めの言葉をいただいた。

15:30 道具を整理した後、VC へ。20分程で到着。

16:30 道具の清掃を終え、VFC メンバーとお別れ。

このようなボランティア活動は全12回実施し、延べ106名が参加しました。ご支援、ご協力、ありがとうございました。

人生で忘れられない数字　３．11

趙　京浩　Zhao Jinghao（中国）

私は３．11の数字をどうしても忘れられません。私一人ではなく、この災害にあった人達もみんなこの数字を忘れられないと思います。３．11の数字が何を表すのかは全世界の人達もみんな知っていると思います。これは東日本大震災です。

この日、私は学校が終わって家へ帰って、コンピューターで映画を見ているところでした。私の家がきゅうに揺れてきました。始めは「あ！地震ですね！大丈夫だ！」と思っていました。先日の震度５の地震も大丈夫だったから、「今度も震度５ぐらいの地震か！」と思っていました。でも揺れれば揺れるほどすごく揺れました。その時、私は何も考えずに家から飛び出しました。外に行くと、たくさんの人々が集っていて、私に向かって大声で「早く走って！早く走って！」とさけんでいました。私はみんなが集っている所に行くまでも、私の頭の中は真っ白になっていました。20秒後に、いしきが回復したのかきゅうにへんな声が聞こえるし、木が大風で揺れるように建物がすごく揺れていてとても怖かったです。１分30秒ぐらいすぎると地震が止まりました。そのように、私は大地震をたいけんしました。前に何回もあった地震は何でもありませんでした。今度のような強い地震は初めてでした。私は私よりも学校の７階にいる先生と学生たちはどうだったか、無事だったかと心配で、いろいろ考えました。

２時間たつと、午後の学生達が家へ帰ってきて、彼らといろいろなことを話し合いました。学生達は全員死んだと思いました。その後で、私達は隣にいる人達と一緒に近くにある小学校に行きました。小学校に行くと、たくさんの人々が集まっていました。私達は日本人がどうしているか見ていました。何分かたつと、その人達はみんな近くにある避難所をさがしに行きました。私達も一緒に避難所に行きました。その時、私はこう思いました。「さすが日本人ですね！地震に対しても避難する所があるんですね。」夜10時ごろに、食べものと水をもらいました。一人におにぎり一つと水１本ずつ

くれました。その時、それらの物は私達にはお金をたくさん払っても、かうことができない重要な物でした。おなかがすいている人達に何よりも大切な物になりました。

何日かすぎても余震は止まらないで続いていました。私は立っていると、地震で体がふるえているのか、あるいは私の足が怖くてふるえているのかよくわかりませんでした。後で、地震で日本の建物が倒れなかったという新聞を見た私は、日本の建物は本当に硬いと思いました。もし今度のような大地震が私の国で起きたら、建物が全部倒れてしまうと心の中で言いました。

私は今度の地震で、私の人生にとって貴重な経験をしました。３．11 の数字、私は忘れない。今回の地震にあったみんな一緒に頑張りましょう！　がんばろう東北！がんばろう仙台！

地震の時私は

姜　泰権 Jiang Taiquan（中国）

３月11日２時46分ごろ強い地震がありました。そのとき私は学校にいました。休みの時間でみんな授業の準備をしているところに突然地震がありました。強くゆれてびっくりしました。たぶん終わった時学校の先生が私達を連れて外に飛び出ました。僕は心から「何ですか」と思いました。そんなことは初めてだから何をするか全然わかりませんでした。家に帰る時に建物、道路があちらこちらで壊れているところを見て心配しました。僕の家は大丈夫かなと思って急いで行きました。いろいろ荷物が落ちていて困りました。すぐにパスポート、外国人登録証、財布、お菓子等を持って小学校へ避難しました。また強い余震が来るかも知れないですから、小学校に行きました。小学校では、老人も子供達もたくさんの人々がいました。避難所の管理員はやさしかったです。一人に一個毛布と食べ物をあげました。その日の晩寒いし、人がたくさんいるから一畳に二人ぐらい泊まったのでたいへんでした。

次の日３月12日に友達と一緒に自転車で、地震と津波の重要なところ多賀城市にいきました。ニュースで見たけど、信じられなかったので行って見ました。２時間ぐらいかかりました。到着した時本当にびっくりしました。多い車、建物が津波によって大部分ゴミになりました。豚、犬等たくさんの動物が死んでしまいました。話では表現できないことでした。人も少ないし怖いから、写真をとってすぐに帰りました。

３、４日ガス、電気、水が出ないので横浜に住んでいる親戚の家に、友達とバス、電車を３回４回乗り換えて、もう避難しました。地震によって電車がたぶん止まっているから、乗り換えなければなりませんでした。横浜でもときどき電気が出ないし、スーパーで食べ物も少なかったです。その後仙台にいる友達から電話が来て「今仙台大丈夫電気、ガスたぶん出る、コンビニも営業する」と聞いて授業も始まりますから、もう仙台に戻りました。やっぱり仙台はよくなりました。ガス、電気、水が出ない家もあるけ

ども僕が住んでいるところは何でもありました。でも国へいる家族は仙台は危ないから、早く帰ろうと言いました。実は仙台は大丈夫だけど、海外のニュースで誇張するから心配するそうです。

４月12日授業が始まりました。地震のため新学生も来ないし、国へ帰った学生達も戻らないから授業はさびしかったです。今僕は新学生達も国へ帰った学生も、仙台は最初のままなので帰るのを期待します。

本回の地震は私が一生で忘れないことです。

地震の後

邢　雨微　Xing Yuwei（中国）

世界で、日本というのは、地震が起きやすい国だそうです。日本へ来る前に、“地震があったら、こわいのは外国人の方だと聞いたことがありました。わたしは日本でもう1年ぐらい経ちましたが、普通のような地震はもう日本人のように慣れました。でも今回の東北大地震は私の一生で忘れない事です。

３月11日午後２時46分ごろ、わたしがいつものようにうちで掃除しながらテレビを見ている時、突然地震が起きました。当時、わたしはあまり気にしませんでしたが、だんだん揺れが大きくなって、走れないし、立てないし、すごくびっくりしました。その後すぐ外に出ましたが、心配なので部屋に戻れませんでした。ずっと外にいたまま待っていました。

夜になったら、友だちと一緒に家から近くの小学校へ避難しました。隣人も、全部、避難所に集まって、狭いところで座るしか何もできないし、さむいし……。その時、「エアコンがあれば、どんな幸せなことになって」、「今回の地震は夢になったら、よかったな」と思って、現実に戻ると、まだひどい状況が続いていました。たとえ頭を揺らしても、目が覚めませんでした。

生れて以来、初めて、こんなことがあってすごく驚きましたから、どうすればいいかわからないし、母のことを思い出しました。地震から三日目、食料も水も底をつきました。そこで、生きるために、一度、帰国しました。

ところで、私は国へ帰ったら、無事に生きられましたけれど、日本人は、逃げるところがなくて、地震の後に、電気もないし、水もないし、食事ももらえにくいし……。生きるための必要な物を取りたくて、毎日、スタミナがかかりましたけど、いい秩序を保って、長い列に並んで待ちましたから、いろいろなことに向き合わなければならなかったです。日本が彼らの故郷だと知っているんです。

世界でも大きい地震ということですが、日本で起きましたけど、日本人はいまだに、いつもどおり落ち着いて暮しています。災難に遭ったというより、よく日本人の本性を表しました。とても私を感心させています。

今度の東日本大地震は、忘れられないだけではなくて、もっと日本人が何かにあっても落ち着いて向き合うことをよく学ばせてもらいました。

このような生き方の人間がいる国は負けないと思っています。

百年後の大地震

薛　嫚玉　Xuen Manyu（中国）

日本で大地震および大津波が起きました。ぜんせかいを震撼させました。みんなは日本の災害についての情報に十分注意しました。アメリカ、中国、韓国など世界の国々が日本を手伝ってあげました。

「日本頑張ろう、仙台頑張ろう！」等、いろいろな外国のテレビが放送しました。怖い、悲しい……。地震のとき、わたしの両親は毎日テレビの前に集まりました。「本当にしんじられない。むすめのすんでいるところで地震と大津波がおきた」といいました。だいじょうぶかどうか、とてもしんぱいでした。母は涙を流しました。すぐれんらくしたかったですが、れんらくできませんでした。この時、わたしはもう安全なところへにげていました。

急に揺れが大きくなって、走れないし、立てないし……。目の前で学校のビルがゆれて、かべがおちて、ろめんがゆれて、すぐおわりました。わたしのこころは出たようです。それから、けいたい電話はもう信号がありませんでした。

もう３時間がすぎました。わたしたちはうちへかえりました。窓からみると、おおぜいの日本人が自分の大切な物を持っていきました。何を持っていきますか。どこへいくつもりですか。たくさんもんだいがあるとおもいました。すぐでました。聞いたあとで、わかりました。しんせつな日本人が「いっしょにいきましょう」といいました。それから、パスポート、外国人登録証、財布、お菓子等を持って、小学校へひなんに行きました。

避難所で夜ご飯を食べるとき、ニュースで大津波の情ほうをききました。避難所の中はだいこんらんになりました。わたしは津波というものが何なのか、まったくわかりませんでした。津波は仙台市内にむかってくると、ききました。とてもこわくて、心配でした。

水もないし、電気もないし、避難所で３日間をすごしました。避難所で毎日、水と食べ物をもらいました。一番大変だったのは、福島でばくはつがおきたことでした。それは心配でした。

外国人は国へ帰りたいと思います。わたしもそうおもいました。中国大使館から飛行機がむかえにきました。よくじつ、仙台から新潟までバスでいきました。よる、新潟に到着しました。そこには中国人の留学生がいっぱいいました。空港には、日本のきしゃがたくさんいました。記者たちはわたしたちにいろいろききました。その番組は日本のNHKでした。それから、チケットをかいました。ひこうきにのるとき、わたしは仙台のほうにむかっていいました。日本頑張ろう！　仙台頑張ろう！

ついてない日　３月11日

Phakami Magar Ram Bahadur（ネパール）

３月11日午後２時46分、私は学校でそうじしてるとき地震がおきました。そのときみな学生はびっくりしました。その時私はつくえの下に入りました。10分でじしんがとまりました。とまったとき、みな学校の前をはしって小さいこうえんへ行きました。その時なんかいも地震がおきました。じしんがあった時私はかみをこころからおもいました。じしんの時みんなしんぱいしました。いつもじしんがあると何をしますかとおもいました。

じしんがあった後で４時ごろみんなアパートへかえりました。アパートへつきました。部屋に入っていろいろなものがたおれました。じしんの後は水もないし電気もないしガスもないし食べ物もないしたいへんでした。じしんがあった日は何もたべませんでした。その日はネパール人の学生はいっしょにすわっていろいろな話をしました。その日は私はねませんでした。

つぎの日はみせへ行ってカップラーメンを買って、ともだちといっしょにたべました。１つだけ食べました。そのみせになにもないからたいへんでした。

じしんのとき私のこころがなくなりました。そのときみんなは何もことばになりませんでした。もしまいにちじしんがきたら何をしますかとおもいました。そのときは昔の日とおなじになりました。電気とかガスがないですから、むかしのものがたりできいたとおりになりました。じしんのとき電話はどこでもできませんでした。だからかぞくがしんぱいしましたとおもってさびしかったです。でんわがないからともだちにあうことができませんでした。「今何をしていますか」のことばをおもって、私は今せかいでひとりでいますとおもいました。

いまでもちいさいじしんがあったら私はその日をおもいます。こんかいのおおきいじしんは私のいっしょうでわすれないことです。

番外編

次ページからは、前ページまでとは異なり、震災後に当校に送られてきた学生からのメールと手紙、また当校の教師が書いた作文が収録されています。

青島（中国）からのメール

車　維華　Che Weihua（中国）

※中国語のメールを日本語に翻訳しました。

佐々木校長先生と皆様へ

私は車維華です。この一年半の勉強において大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

生存者として、私は３月11日の大地震で車や部屋が津波に飲みこまれたシーンを見ました。３月12日の夕方、私はようやく仙台市内に戻ってきました。しかし、余震が緩やかになる兆しはまったく見えませんでした。また、３月13日の福島第一原発の事故で、中国の学生たちは更に緊張していました。何日も避難所で過ごしました。私は３月14日に青森へ行き、３月15日に札幌に着きました。そして、３月16日に札幌から韓国を経由して、その日の午後、中国の青島に到着しました、

震災のため、学校の卒業式に参加できず、様々な手続きもしませんでした。どうかご理解ください。

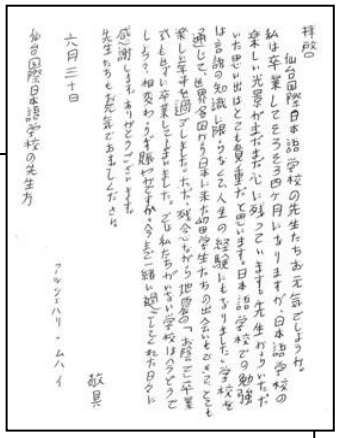
もし校長先生とみなさんが中国にいらっしゃることがあれば、私がご案内いたします。

車維華

2011年４月15日

Love Letter from Saudi Arabia　vol. 1

Muhyi Shaker A Alshehri(サウジアラビア)


拝啓
仙台国際日本語学校の先生方
私は卒業してそろそろ四ヶ月になりますが、日本語学校の楽しい光景がまだまだ心に残っています。先生からいただいた思い出はとても貴重だと思います。日本語学校での勉強は言語の知識に限らなくて、人生の経験にもなりました。学校を通じて、世界各国から日本に来た留学生たちの出会いもできて、とても楽しい一年半を過しました。ただ、残念ながら地震の「お陰で」卒業式もせずに卒業してしまいました。
では私たちがいない学校は今どうでしょう？　相変わらず賑やかですか。今まで一緒に過ごしてくれた日々に感謝します。ありがとうございます。先生たちもお元気でおすごしください。
敬具
六月三十日
アルシェハリ・ムハイ
仙台国際日本語学校の先生方

拝啓

仙台国際日本語学校の先生たちお元気でしょうか。

私は卒業してそろそろ四カ月になりますが、日本語学校の楽しい光景がまだまだ心に残っています。先生からいただいた思い出はとても貴重だと思います。日本語学校での勉強は言語の知識に限らなくて、人生の経験にもなりました。学校を通じて、世界各国から日本に来た留学生たちの出会いもできて、とても楽しい一年半を過しました。ただ、残念ながら地震の「お陰で」卒業式もせずに卒業してしまいました。

では私たちがいない学校は今どうでしょう？　相変わらず賑やかですか。今まで一緒に過ごしてくれた日々に感謝します。ありがとうございます。先生たちもお元気でおすごしください。

敬具

六月三十日

アルシェハリ・ムハイ

Muhyi(ムハイ)さん　遠藤(えんどう)

Love Letter from Saudi Arabia vol. 2

Suhail Ahmed R Kalkatawi（サウジアラビア）

佐々木先生

拝啓

最近は毎日蒸し暑いですが、お元気でいらっしゃいますか。

仙台国際日本語学校は楽しかったです。やっぱりこの学校の先生たちのおかげで日本語をよくなりました。先月から大学が始まったから新しい生活をしています。東海大学は本当にいいですが、仙台国際日本語学校の先生たちは私たちに家族のように接してくださいました。

東京は仙台に比べてたくさん違うことがあります。仙台は寒くて住みにくいですが、東京は暑くてエアコンがないと生活できません。大学で色んな科目を勉強したり、たくさんレポートを書いたりしています。大変なことは日本語と漢字です。

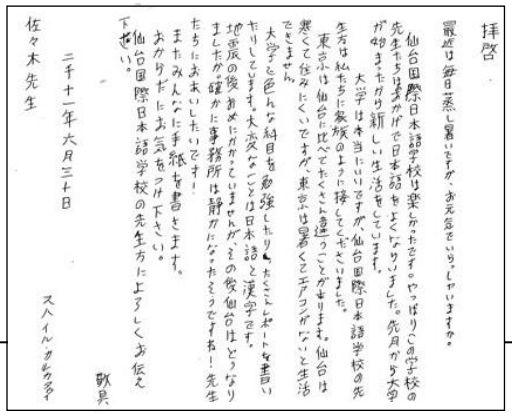
地震の後おめにかかっていませんが、その後仙台はどうなりましたか。確かに事務所は静かになったそうですね！先生たちにおあいしたいです。

またみんなに手紙を書きます。おからだにお気をつけ下さい。仙台国際日本語学校の先生方によろしくお伝えください。

敬具

二千十一年六月三十日

スハイル・カルカタウィ



Love Letter from Saudi Arabia　vol. 3

Ghalib Ayad M Alanazi（サウジアラビア）

仙台国際日本語学校の先生方

拝啓

暑くなりました。お元気でいらっしゃいますか。

日本に来てはじめに仙台に行って二年間ぐらい仙台に住んでいて日本語学校に通いました。初めの頃は、私は日本語や日本の文化など知らなくて大変でした。そのときは先生たちから様々な基本的なことを教えていただいたおかげで順調に勉強を進めることができました。校長先生は母のようにお世話してくださいました。

今は東京で新しい生活をやっていますが、大震災で帰国して遅く日本に戻ってきましたから途中で入学して色々な授業が進んでしまっていて大変でした。でも今では頑張って友達もできて大学の生活に慣れてきました。日本語はもっとうまくなりました。

先生たちのおかげで日本で生活ができるようになりました。本当に気持を込めて感謝いたします。先生たちもお元気でお過ごしください。

敬具

六月三十日

ガリブ

震災ボランティアに参加して

釜沢　久美子 Kamazawa Kumiko（日本）
仙台国際日本語学校非常勤講師

お疲れ様です。

釜沢です。

土曜のボランティア・宮城野チームは、宮城野区岡田のＳさんの畑の流入物片づけでした。Ｓさんはリンゴジュースの差し入れなどもしてくださり、ご自身も２，３度顔を出して作業をなさっていました。

総勢26，7名（途中で増えたようなので、もっと多いかもしれません）の大人数グループの作業でした。できれば７名そろって参加したいとわがままを言ったせいで11時近くまで待ち、その間にお腹がすいてきましたが、仕事があってよかったです。

文字通り根こそぎ流されてきた（多分）松の木なども引き上げてましたが、多くは流されてきて、そのままそこに残ってしまったタイヤとか瓶とかビニールの袋とか、小枝などの木くずなどをひたすら拾いました。

学生達は、驚くほどせっせと働いてました。私がなまくら者なのでしょうか。

すでにボランティア活動３回目のカンさんたちは、一番楽な仕事だったと言っていました。泥カキなどがなかったので。

津波で時がとまったままひび割れていく田んぼが周りに広がる一方、Ｓさんの畑（の一部）では菜の花たちがしっかり花を咲かせていました。どちらも自然の力。人間には太刀打ちできないなぁと改めて感じた一方で、菜の花だけではなくもっといろいろな物が芽吹くはずだった畑のごみをもくもくと掻き集めるＳさんの小さな（小柄なおじさんでした）姿を忘れてはいけないなと思いました。

などと殊勝なことを言いつつ、わがままを言わせて頂けば、今後はトイレのあるところで作業したいです！・・・できるだけ。田んぼの真ん中なので「トイレはないかと思います。」と説明を受けたときには時すでに遅し。「ない」と言われると不安になる、行きたくなるので、できるだけ水分を控えつつの作業でした。

幸か不幸か風が強かったせいで、あまり暑くならなかったので助かりました。

今週の土曜（21日）は都合がつきませんが、その後はまた参加させてください。

今週からまたよろしくお願いします。

釜沢

地震

田中　治美 Tanaka Harumi（日本）
仙台国際日本語学校非常勤講師

３月11日の地震の約１ヶ月前、２月22日にニュージーランドで地震があり語学学校の校舎が倒壊し、日本人留学生26名が亡くなった。そのニュースを見ながら、私は2009年に日本語教師として赴任していたインドネシアで遭った地震を思い出していた。その地震は授業中に起きた。私は学生に机の下に隠れるよう指示したが、あっという間に学生が教室から逃げ出してしまった。揺れている中、私も教室の外にでたが、もう他の教室にも誰もいない。非常階段までの廊下を走っていると各教室から天井が落ちる音と共に砂埃が廊下に舞ってきて前が見えなくなった。その時初めて、この建物は倒壊するかもしれない、死ぬかもしれないと、ニュースで見たことのある建物の倒壊する映像が頭をよぎった。階段まで行くと、大騒ぎになっていた。裸足の人、逃げている途中で気を失ってしまう人もいて、男子学生がその度に４人くらいで担ぎあげて階段を降りていた。外に避難してからも余震が起こるとパニックになり、何人も救急車で運ばれていった。この地震の経験で「外国人が地震に遭うと大変なパニックになる」と私の心に刻まれた。また地震の揺れが収まってから避難するという日本の常識は通用しない場所もあるのだということも知った。そんなことを２月のニュースで思い返していた。

そんな中、３月11日に地震は起こった。長い揺れの中でまず天井が落ちてこないか心配になって確認し、その後に学生の様子を見た。学生達は顔をひきつらせながらも机の下に潜って、必死で机の足を握っている。悲鳴をあげたり、勝手に逃げ出したりする人もいない。揺れが収まったところで、指示に従って、外への避難もスムーズに行なっていた。外へ出た後も冗談を言ったりしている学生もいて、パニックになったり、気を失ったりする人など一人もいない。初めての大きな地震のはずなのに「なぜだろう。」

と不思議に思った。あとで年に２回避難訓練をしていたからだと聞いた。でも、地震の教育がしっかりされていたからとはいえ、インドネシアとはあまりに対照的で学生がパニックにならず冷静であったのが思いも掛けず意外だった。

もう一つ印象的な出来事があった。地震の日から電気もガスも水道も止まり、私は翌日から水や食糧確保に走り回り始めた。翌々日の 13日に市内で開いている店を探している最中、一人の学生とばったり会った。「ちゃんと食べてる？どこに避難しているの？」などと聞いた後に、今度は学生から「先生、ボランティアをしたいんだけど、どこに行ったらいいですか。」と質問されたのだ。まだ地震からたった２日しか経っていない中で、母国でない地で遭った初めての地震で不安なはずなのに、そして、同じように食糧など行き届いていないはずなのに、こんな大変な中で困った人達を助けたいという気持ちを持てるなんて、とても驚き感心してしまった。そして自分の生活を立て直すのに精一杯で、食糧確保のことだけを考えていた自分が恥ずかしかった。短い会話で別れたが、私の中では大きな出来事だった。

これからも地震はあるだろう。もうこの３年で２度も遭っているのだから、交通事故に遭うより確率は高い。どこで遭うかもわからない。でも、どこで遭っても冷静でいられるよう、そしてこの学生のように大変な時こそ人の役にたちたいと他人を思いやる気持ちを持てるようにいたい。

今、私たちにできること

瀬戸　稔彦　Seto Toshihiko（日本）
仙台国際日本語学校専任講師

３月11日午後２時46分、教員室で次の授業の準備をしていた私は、激しい揺れを感じ、とっさに席を離れました。その直後、さっきまで座っていた場所には白板が倒れ、本棚からは教科書が次々と落下していました。廊下には学生十数人と教員数名が屈みこんでいました。宮城県は近い将来、高い確率で大地震が発生すると言われていた地域ですが、それがついに来たのだと瞬時に思いました。その揺れは「嘘でしょ？」と笑ってしまうほど大きく、長い時間続きました。廊下の電気が消え、オレンジ色の小さな非常灯に切り替わった時は、無事ではいられないだろうと覚悟したほどでした。後のニュースで、仙台国際日本語学校のある仙台市青葉区の震度は６弱と伝えられましたが、ビルの７階にある当校の揺れはそれ以上に強く、激しかったような気がします。

本震と思われる揺れが治まった後、学生たちを学校の前の公園に避難させました。携帯電話が使えないため、一切の情報がなかったのですが、私たちは今後の生活について考え得る最悪の事態を想定し、食糧を調達しに、近くのコンビニへと走りました。電気が消えた店内には大勢の人がいました。お弁当やおにぎり、パンなどはすでにありませんでしたが、お菓子と水はまだ残っていました。店員は電卓を使い、懸命に会計を済ませてくれました。公園へ戻り、買ったお菓子や飲み物を学生たちに手渡すと、おやつだと勘違いし、その場で食べてしまう者もいました。

１時間ほどが過ぎたでしょうか。依然、街路樹が揺れるほどの強い余震が何度も発生していましたが、「14日月曜日の朝９時、またここで会おう」と、校長が学生たちに学校としての判断を伝え、解散しました。私は普段電車で通勤しているのですが、この日は歩いて帰宅せざるを得ませんでした。雪が降っていました。街は、信号が消え、建物のガラスが割れ落ち、道路のあちこちが隆起し、ひび割れていました。１時間ほど歩く

と、唯一電気がついているテレビ局を見つけました。中に入り、ロビーにあるテレビを何気なく見ると、海が映っていました。ここはどこなのだろうとよく見ると、画面の左上に「LIVE仙台空港」とありました。その意味を理解するまで、時間がかかりました。大津波警報の赤や黄色は日本列島を１周していました。私はこの時ようやく大変なことが起きたことを知ったのです。それは、先ほど公園に避難した際に思い描いていた「最悪の事態」を軽々と超えるものでした。不安の中、さらに１時間ほど歩き、自宅に着いた頃には辺りはすっかり暗くなっていました。家の中は足の踏み場もない状況でした。携帯電話の灯りを頼りに、土足で中へと入って行きましたが、そこで生活することは困難でした。

避難所となった小学校は人で溢れかえっていました。しかし、私は幸運にも図書室の出入口付近に居場所を確保することができました。すぐ後ろにある引き戸を開け閉めする「ガラガラッ」という音は、地震が来る前の地鳴りに似ていました。誰かが家族や知人の安否を確かめに来るたび、その音に怯えました。ラジオは沿岸部の被害状況を伝えていました。「死者・行方不明者多数」、「被害の全貌は掴めません」、映像がないだけに余計に恐怖心が増しました。一切の防寒具がない中、スーツのまま寒さと恐怖に震え、ほとんど眠らずに一夜を明かしました。バナナ半分と小分けにされたお菓子が１つ、翌朝支給された食糧はそれだけでしたが、あのような状況の中では非常にありがたく感じられました。携帯電話を 10分間充電するために２時間並びましたが、石巻市にいる家族や友人らとは連絡がとれませんでした。結局、私はこの避難所で３日間を過ごしました。

14日月曜日、避難所から自転車で、「またここで会おう」と約束した学校の前の公園へと向かいました。学生たちは思いのほか多く集まって来ました。日本人である私たちですら大変なのに、異国の地で被災した彼らはどんなに辛く、苦しい思いをしたかわかりません。それでも、こちらの生活を心配してくれる彼らを見て、たくましく感じたことを今でも覚えています。幸い、そこでほとんどの学生の安否は確認できたのですが、

数名についてはわかりませんでした。

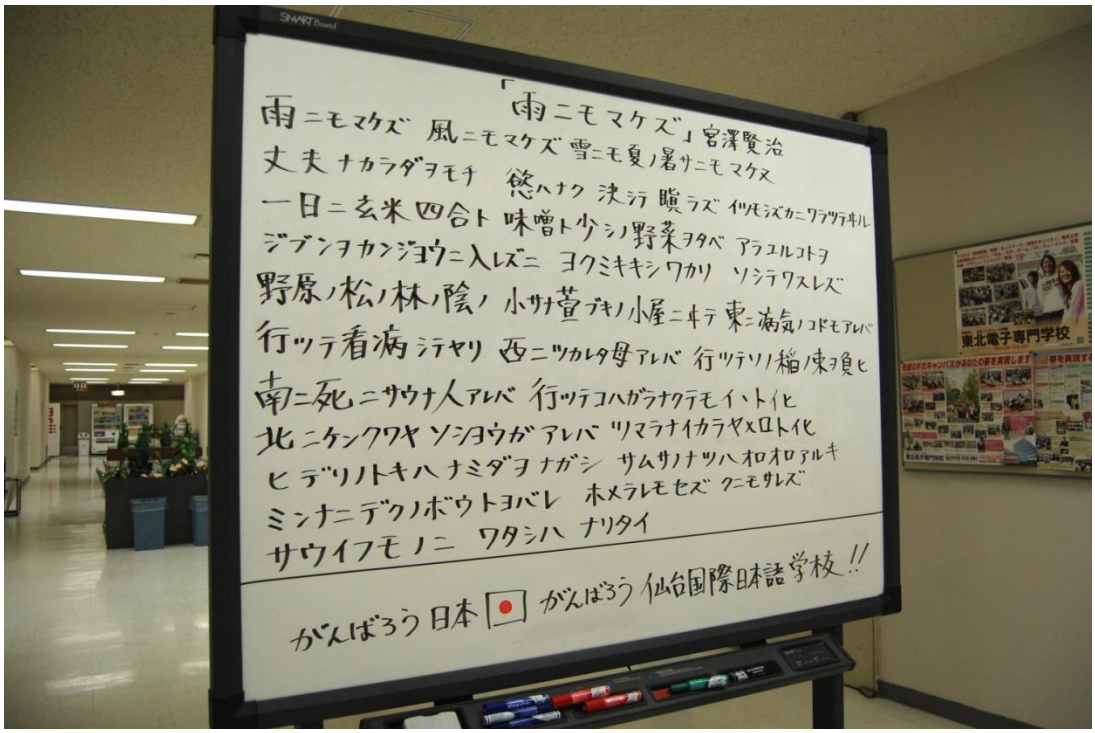
翌15日火曜日、その中の１名がおそらく石巻市にいるだろうということと、私自身家族と連絡がとれていなかったこともあり、もう一人の教員と車で石巻市へと向かいました。石巻市は宮城県の沿岸部に位置し、当時の報道では「壊滅」と伝えられていた場所です。震災からすでに５日が過ぎていましたが、石巻市内は水が残っているところが多く、車を走らせることは困難でした。そのため、海水が引いているコンビニに車を停め、少しでも多くの情報を得ようと実家のある方向へと歩きました。実家は１階が津波の被害を受けていましたが形を留めており、私はそこで家族と会うことができました。父親に避難所や水没している地域の情報などを聞き、今度は自転車で学生がいるはずの町へと移動しました。海水やら油やらが混ざり合った臭い、鳴り響くサイレンやヘリコプターの音、変わり果てた故郷の景色、その時のことはこれからも決して忘れることはないでしょう。何とか学生がいる町の近くまで行くことができましたが、膝下まである海水と汚泥に行く手を阻まれ、捜索は途中で断念せざるを得ませんでした。

16日水曜日、行方がわからなかった数名の学生のうちの一人が、ひょっこり学校にやって来ました。また、石巻にいた学生も含め、他の学生たちについても電話で無事であることがわかりました。地震から６日が経って、ようやく仙台国際日本語学校全員の無事が確認できたのです。

公園に集まった14日以降、多くの学生が仙台を離れました。インフラのほとんどが停止し、満足に食べ物を確保することもできない当時の状況を考えれば無理もありません。しかし、20～30人の学生は仙台に残っており、その中には３月に卒業する者もいました。当初は震災により中止ということになっていた卒業式ですが、彼らのためにどんな形でもいいからと急遽執り行うことを決めました。例年とは違う小さな教室、少ない人数ではありましたが、笑いあり涙ありの感動的な式になりました。そこにいた誰もが、一時ではあれ被災した辛さを忘れることができたのではないでしょうか。

あれから半年以上が過ぎました。地震後の対応、小さな卒業式、学生が少ない４月

の授業再開、ブログ等による情報発信、ボランティア活動…。こうして振り返ってみると、この半年間、私たちは限られた環境の中で、学校として「今、できること」を常に考えてきたように思います。この震災文集もその気持ちを形としてまとめたものです。私たち教職員も被災者となりましたが、以前と変わらぬ生活を淡々と送ることが「仙台は大丈夫、学校は大丈夫」というメッセージを発信することになるという信念のもと、必死で日本語学校としての機能を維持し続けました。そんな中、被災地の日本語学校として、また外国人によるボランティア集団として何度か取材を受け、それなりの反響もありました。2011年10月現在、当校には多くの学生が戻り、震災前と同じように勉強に励んでいます。その一方、退学・転校した学生や、４月の入学をキャンセルした入学予定者は少なくありません。また、震災後は入学希望者数が激減しました。これらの問題は、学校としてどんなに努力しようとも解決できないところに原因があるのかもしれません。しかし、これからも私たちは学生たちのために、日本語学校としての役割を日々果たしていこうと思います。学生たちにとって、日本の、日本人の最前線である私たちのひたむきさや粘り強さを、彼らを通して世界に伝えていこうと思います。それが「今、私たちにできること」であり、私たちにしかできない使命だと信じて。


「雨ニモマケズ」宮澤賢治
雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ
丈夫ナカラダヲモチ 慾ハナク 決シテ瞋ラズ イツモシズカニワラッテヰル
一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ野菜ヲタベ アラユルコトヲ
ジブンヲカンジョウニ入レズニ ヨクミキキシワカリ ソシテワスレズ
野原ノ松ノ林ノ陰ノ 小サナ萱ブキノ小屋ニヰテ 東ニ病気ノコドモアレバ
行ッテ看病シテヤリ 西ニツカレタ母アレバ 行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ
南ニ死ニサウナ人アレバ 行ッテコハガラナクテモイヽトイヒ
北ニケンクワヤ ソショウガアレバ ツマラナイカラヤメロトイヒ
ヒデリノトキハ ナミダヲ ナガシ サムサノナツハオロオロアルキ
ミンナニデクノボウトヨバレ ホメラレモセズ クニモサレズ
サウイフモノニ ワタシハ ナリタイ
がんばろう日本 がんばろう 仙台国際日本語学校!!
東北電子専門学校

おわりに

夜空を眺めるたびに、あの日のことを思い出す。あの日から９カ月が過ぎた。早いもので 2011 年も残すところ、あとわずかとなった。

この文集を作ると決まったのが４月上旬で、それから２カ月かけて作文を集め、７月の夏休み、パソコンへの入力など編集作業に取りかかった。９月の秋休み以降、本格的な編集作業に取り組み、こうして 12 月に完成するに至った。

完成した原稿を読み返してみると、彼らの作文は、大震災の体験を記した作文であるにもかかわらず、みなどこか温かみがある。暗い夜空に浮かぶ星座のように、それを眺める人の心をそっとやさしく包み込む。それは、きっと、彼ら自身の優しさ、たくましさであり、彼らが感じた日本人の思いやり、強さなのだと思う。

遥か遠くで光る星は、太陽や月ほど生活する上で役には立たない。だが、星は古来より暗闇を進むための道標となってきた。

この文集が、作成に携わったすべての方、読んでくださった方にとって人生における一つの道標となってくれれば幸いである。

忘れないこと。これが、ずっと私たちにできること。

震災以来、仙台国際日本語学校を応援してくださった全ての方々に、この場を借りて改めてお礼を申し上げたいと存じます。有難うございました。

「ワタシタチの３・11」編集委員会
代表　遠藤 和彦

ワタシタチの３・11

－留学生 40 名の作文集－

2011 年 12 月 25 日　初版第１刷　発行

2012 年　9 月　3 日　初版第４刷　発行

編　者　「ワタシタチの３・11」編集委員会

佐々木 真知子・神藤 めぐみ・遠藤 和彦・瀬戸 稔彦・田中 治美

発行所・印刷所　仙台国際日本語学校

〒980-0013

宮城県仙台市青葉区花京院 1-3-1

電話　022（224）6509

FAX　022（224）6517

E-Mail　sjls@sjls.jp

I Will Not Forget 3 ●11

To Those who prayed for Japan

At 14:46 on March 11th, 2011, a tremendous earthquake and tsunami in Tohoku, Japan caused devastating damage to the coastal area of the Pacific Ocean side, resulting in the deaths of more than 15,000 people. Also, because of radioactive pollution from the Fukushima No.1 nuclear power plant released following damage caused by the tsunami, people who lived nearby were forced to evacuate. At that time, foreign nationals left Japan either of their own accord or following evacuation advisories issued by the embassies of their home countries' governments.

In Sendai, where the Sendai International School of Japanese is located, a quake of 6 on the Japanese intensity scale hit the city while its coastal area including the port was devastated by the tsunami. Since both Sendai and Fukushima are located in the Tohoku region, people had strong concerns about radioactive pollution despite the fact that Sendai is about 100 km away from the Fukushima nuclear power plants.

After a month had passed since the earthquake, life had returned to normal since the infrastructure was functioning again and we could shop and go to work or school. Our school building suffered almost no damage, so our classrooms were available for our students. However, we started the new academic year in April with a miserable atmosphere since harmful rumours had led more than half of the students who had left Japan to decide not to come back, and led new students to cancel.

Under such circumstances, we changed our way of thinking and made up our minds to do what we could do for the time being. We took on three activities this year.

The first one was volunteer activity. We cleared away the rubble and the mud in the coastal area hit by the tsunami. We were speechless when we saw the area devastated by the tsunami firsthand rather than on a TV or PC screen. We worked hard with shovels together with other Japanese people. All our international students told us that they had had a valuable experience which they would never forget.

Secondly, we conducted more school events than usual. We enjoyed ourselves a lot at many events such as cherry blossom viewing, sports events, festivals and hot spring. It may sound imprudent in such crisis, but we tried to demonstrate the safety of Sendai by putting photos of our events up on our school's blog and Facebook page. Things we say about the safety of the city are never as convincing as photos of international students smiling as they eat rice cakes wrapped in oak leaves.

Thirdly, we decided to assemble-essays about the experiences of the earthquake disaster by the international students. Forty international students wrote about their circumstances and feelings when the earthquake and the tsunami took place in a 'foreign' country, namely Japan. Written in simple words, these essays explain how they found the experience and the behaviour of Japanese people and why they continue to study in Japan after that.

In Japan, media such as newspapers and magazines covered this collection of essays several times, getting attention especially because they were written not in students' mother tongues but Japanese. However, we noticed that the Japanese version was not enough to tell the whole world the details around that time and to help them remember 3.11.

That is why we decided to translate some of the essays into English. The collection includes essays by five international students of different nationalities and

one essay by a Japanese instructor. We strongly believe that each of them is moving beyond a language barrier.

After the earthquake disaster, we had a lot of support from rescue parties from various countries and relief supplies delivered by them. Additionally, heartwarming messages such as ‘PRAY FOR JAPAN’ on TV, newspapers and the Internet comforted and cheered us a lot.

It has been a year. This time we would like to send this collection of essays along with our appreciation to the entire world.

I would like to ask for your continued attention to our country. Thank you very much.

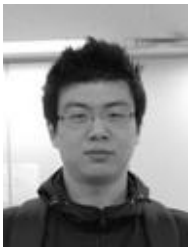
March 11, 2012

editor in chief Kazuhiko, ENDO

Sendai International School of Japanese

My First Tremendous Earthquake

Moon Junghyun（Korea）



On March 11th, at the time of the earthquake I was on my way to an Internet café after school. As I don't have the Internet access at home, going to an Internet café is one of my pleasures on weekends.

When I was walking along the road, the ground started to tremble all of sudden. I had become used to earthquakes as I have been in Japan for two years. However, I soon noticed that it was totally different from ones I had already experienced. I started to run to the park which was 50 meters away from where I was. More and more people started to evacuate from nearby buildings and came to the park. There were 2,300 people who arrived in short period of time. Emergency bells were ringing in the now-empty buildings. When the shaking stopped at last, I heard sirens from the various direction and saw smoke behind the buildings as well. There were some helicopters flying in the sky. And then it started to snow. So, I found everything around me unbelievable. Maybe this is why I couldn't tell what really happened and what a tragic disaster took place at all.

After that, I went to a net café and saw the entire downtown had lost electricity. When I got back home, luckily my house wasn't seriously damaged. However, it was chaotic inside and there was no electricity and water. I put some bottled water and cup noodles into my bag and evacuated to the nearby Komatsushima Elementary school. Until then, I mistakenly thought everything would haved recovered by the next day.

However, after I read a newspaper the next morning, I soon learned I found how naïve I had been.

I didn't think people -hundreds of thousands of people- had been killed by the earthquake at all. When I learned that , I was totally terrified. Aftershocks and fear kept me sleepless until next day.

The next morning I went to the Korean consulate. I expected that the consulate would provide bottled water or something while the evacuation center had nothing. As was to be expected, there were some food and water in the consulate. Furthermore, I washed my face for the first time in three days. I charged my mobile phone and was able to contact my family and friends.

I became an interpreter for a news crew from a Korean broadcast station after I happened to be interviewed by them at that time. Since that day, as their interpreter, I visited various areas hit by the earthquake together with them.

The devastated areas were more tragic than I imagined. I finally learned what the magnitude of the earthquake and the damage.

Among various sites I went to, the most impressive people for me were the workers whom I met in a general hospital in Rikuzentakata. The first floor was covered by mud because of the earthquake and Tsunami. While we were thinking "no one can possibly still be in such a place", we discovered signs of people on the 3rd floor. Surprisingly, there were about 160 elderly and bedridden patients in the hospital; doctors and nurses hadn't left them behind and were trying to take care of them . As almost all of those 160 patients were immobile, hospital staff desperately brought them to the 3rd floor to escape from the tsunami. With no water, gas and electricity left, the hospital was unable to function as a hospital. Above all, the biggest difficulties they faced was the shortage of necessary medicines. Not only myself but also correspondents and a cameraman had tears in our eyes as we witnessed that the hospital staff keeping hope alive and making their

best effort to take care of their patients in such circumstances.

This was not the only place. People in the affected areas we visited kept their hopes up and desperately tried to rebuild their lives under unimaginable circumstances.

As human beings, we were helpless in the face of the natural disaster. However, it was only human beings that could help each other to stand up again. I strongly believe that Japan and the people of Sendai and all devastated areas will rebuild their lives the way they were before the earthquake in time. These experiences made me convinced of this.

I do hope I can be a part of assistance to help Sendai recover as soon as possible.

My First Tremendous Earthquake

Cui Chunxiang（China）

I still clearly remember that I asked my teacher this question during class on the morning on March 11th.

"Sir, are the recent earthquakes signs of a bigger one in the near future?"

"I'm not certain whether there will be bigger earthquakes taking place or not. However, usually big earthquakes are followed by aftershocks."

I was somehow relieved by the answer. This was because I kept notes of the times of the earthquakes even though they were an intensity of 2 or 3 on the Japanese scale in my notebook right after my arrival in Japan. I didn't know those small earthquakes in the past were not comparable to the Great East Japan Earthquake at all. I can't help really laughing at myself since I used to think I would be killed by those small earthquakes. Now I know these ideas were entirely ridiculous and stupid. Although I was totally scared by my first earthquake, I gradually started to think they were not that scary. However, as I thought a big earthquake would hit Miyagi prefecture someday, my feeling of unease remained in my mind whenever earthquakes took place.

In the afternoon on March 11th, I went to my part-time job as usual. My place of work was a curtain company which was close to the sea in the Gamo area. During my shift, I felt the different kind of shaking under my feet. I got out of the office room, saying "Earthquake!" and tightly held the wall next to the door. Although I expected it to stop soon, bigger shakes started. So, I immediately looked around whether there was something dangerous around me. Even though it was badly shaking, others ran to my place because they thought my place was safer. A

Japanese person next to me called her husband probably as she was worried about him. There was already no electricity by then and telephone communication was down. However, as a result of such tremendous quakes, the lockers and the ceiling fell down. Due to the dust filled air, I had trouble breathing. Luckily, the quake lasted a minute or so, so that it wasn't bad.

Everyone went outside through the emergency door. When I thought everyone was fine, something I didn't expect happened. As a Japanese girl had injured her left leg, and her sandal was covered with blood. Looking at her, I realized that the earthquake had already taken place. Surprisingly, cell phone from AU could still had reception. The manager called for an ambulance and the girl was hospitalized.

When we checked the number of workers, we found a trainee girl missing. She came down about 10 minutes later, assisted by two people as she couldn't walk by herself. I talked to her later and learned that she was in the toilet alone and totally horrified when the earthquake occurred. Moreover, she was totally upset by finding the automatic exit door didn't open and she couldn't get out in hurry.

The quakes didn't stop after the tremendous quakes took place. Our leader took us to another building which was more earthquake-proof. Then, he suddenly said "It is safer in this building. So, get inside quickly". When we heard this, we mumbled "We already thought we were going to die inside the building . Why do we have to get in?". Seeing an electric cable swung so widely that appeared to be going to cut off at any time, I thought it was dangerous both inside and outside of the building. Then, everyone was hesitant to go inside. It slipped my mind that I was close to the sea at that time. I just thought I survived the earthquake. I could hardly expect the Tsunami which was high enough to kill us later to rush in. As it was the most tremendous earthquake in my life, I was entirely shocked and couldn't

decide what to do next. Our leader convinced us and succeeded in taking us to the roof of the building.

Within less than 10 minutes, the Tsunami was rushing to our building with making white bubbles from far way. Like toys houses and cars were swept away as bark debris and refuse in a moment. I was stunned by the sites that held cozy houses a minute ago vanished and left only pine trees. Tsunamis are really awful as they take everything away in such a short period of time between its arrival and leaving. I heard that the second and third wave are worse than the first one. Luckily, the second and third wave went another way.

A Japanese woman who lived nearby was searching for her house, saying "I can't find my house. I can't find my house," with tearful expression. Another person wiped her eyes in a corner probably because she worried about her family.

Nature gives human beings hope while at the same time it gives us disappointment. No matter how human beings are strong, we are helpless against natural disaster. Soon, the Tsunami started to ebb away. Then, the fire in houses and factories sprang up here and there. It was like I was watching a blockbuster epic. After we made sure that we were safe, we went down on the 2nd floor and waited until Tsunami completely left.

As the earthquake took place during our working hour, everyone was wearing only light clothing. As it began snowing, I felt incredibly cold. I was glad to be able to warm myself with a big plastic bag.

The earthquake was followed by aftershocks. That was why we expected Tsunami to rush in again and all we could do we was wait. Some factories continued to burn all night long. I sometimes heard explosions.

The sky was beginning to lighten at around 5 am. Soon or later, the red sun

started to rise from the East. It looked redder than usual. I felt like I had won. On the other hand, I felt really sad deep in my heart because of the fact that the sun will always rise after an earthquake and Tsunami but many thousands of dead people will never see it again.

During the early hours surrounded by destruction, I started to see the Self Defense Force members little by little after 7 am. With a closer look, I could tell that they were carrying dead bodies covered by white clothes on stretchers. I was shocked! We safely got out from the building around 9 am.

It was horrible outside. Dead fishes were scattered everywhere. After I walked for a while, I saw cans of beer and juice from the Kirin Brewery Company were scattered everywhere. I felt like I was in the kingdom of beer.

Then, the Self Defense Force took us to a junior high school in Nakanosakae by car. As I finally left the sea side, the feeling of fear and sadness lessened at the bottom of my heart.

Song san and I walked from there to Sendai. I felt like taking a walk from the hell to the heaven. This was because I wasn't starving any more. I stayed in an evacuation center on the first day when I came back to Sendai. A rice ball which was provided there was my first meal since the earthquake.

After that, going back home, I cooked and ate with my friends for a while. One day later, Mr. Endo brought necessary things for the daily life such as gas, water, food and so on. There was nothing I appreciated more than this. I was very impressed and delighted that we were in the thoughts of our teachers during this time.

Afterwards, I went back home temporarily. My parents strongly opposed me returning to Japan, saying "we don't allow you to go to Japan this time." To be

honest, it was our school's blog that made up my mind of returning. I was impressed by our teachers who were consistently working very hard, our teachers who were always making their best for their students in the front line.

Additionally, I became sad, thinking that my resolution of working hard to make my dream come true after finishing a Japanese language school would vanish along with the earthquake. Losing my dream is like a bird with a clipped wing in sky. The bird will fall down somewhere. So, I once again decided to come back to Japan and make a good effort towards my resolution, not listening to my parents who were in strong opposition. I hope Tohoku, Japan works as hard for their resolution as I do.

How Japanese People Behaved

Husain Alamri（Saudi Arabia）

Even before I came to Japan, I was aware that there are earthquakes in Japan and that they frequently caused damage to the country. However, history showed that the level of damage and loss of human life had never been high in Japan so I didn't pay very much attention to earthquakes because I thought no one was killed by them. When I experienced an earthquake for the first time, I wasn't scared at all but found it rather fun. As I increasingly got used to earthquakes, they became like sand storms in Saudi Arabia.

When the tremendous earthquake we had been warned about in this region took place, I couldn't tell how big it was and thought it was the same size as those I had already experienced. I was shocked when Japanese people around me were scared. "Why? Isn't this usual?" Later that day, I was stunned when my mother called me and told me the death toll. "Were the earthquakes today that tremendous?" After the earthquakes, there were no electricity, water and gas. As water and electricity became available again the next day, I accessed the Internet and learned from the news about the tremendous damage caused by the earthquake. It was unbelievable. Ten thousand were killed by the tsunami and another 10,000 went missing.

It was due to the high level of Japanese civil engineering work that no buildings and bridges are destroyed by the earthquake, which is what made me think that the earthquake was small. I had seen earthquakes destroy buildings and bridges and kill a lot of people in other countries on the news since I could remember. However, none of buildings and bridges were destroyed in Sendai and the tsunami

didn’t reach where I live as it is far from the sea. So, I couldn’t tell the size of the earthquake.

After the earthquake, while I couldn’t reach the network with my mobile phone, I had access to the Internet and could post messages on Facebook to relieve my family and friends in Saudi Arabia. Afterwards, my life was difficult as there was no electricity and water all day long. All foods were sold out in convenient stores and supermarkets. All restaurant were closed. I found it was good idea to buy food for two weeks at a time. As I am optimistic, I thought that everything would recover in a short period of time. I held onto those thoughts for a long time as many people were concerned about the radiation. However, others were not optimistic. Since foreign embassies urged us to go back to our own countries, foreigners started to leave Japan. Even though I didn’t want to go home, I had no choice.

My most unforgettable memory is from two days after the earthquake. There was no chaos; everyone formed a line. However, everyone bought more than they needed. I bought twelve bottles of water from a vending machine once.

Sunday , two days after the earthquake, I was forced to go to Tokyo, then Saudi Arabia. When I came back to Japan one month later, almost everything was back to normal. I was surprised. That was due to the fact that Japanese people are very hardworking.

My First Tremendous Earthquake

Bhandari Madan（Nepal）

First of all, I hope that those affected by the Great East Japan Earthquake recover as soon as possible.

The Great East Japan Earthquake on March 11th, 2011 affected our daily lives as international students who come to study in Japan as well as Japanese people.

The Tohoku district was destroyed not only by the earthquake but also the Tsunami and this gave me valuable experience in understanding natural threats and disasters.

When the earthquake occurred, I was at my part time job. Since I had never experienced an earthquake before, I didn't notice what was happening at first. However, seeing Japanese people fleeing, I fled too. I finally noticed that there were tremendous shakes when I got out. We gathered outside in a safe place from falling debris and waited for the shakes to stop. But, the earthquake lasted for the very long time. When the initial shakes stopped, we decided to get our personal belongings from the lockers. As it was still dangerous, a few of us went inside and carried out our belongings from the lockers. Then, we decided to go home.

I usually take a train to get to work and get off the train at the 5th station from my station to change to a bicycle. Although I went to the station by bicycle on that day, I found the train was not running so I decided to ride home. When I was nearing my home, I saw the Tsunami rushing towards me. The tsunami arrived at my feet very rapidly and as I was stunned, I dropped my bicycle and ran away from the surging water. Not knowing where to go, I walked around and popped into where

people gathered. I clearly remember it was a very cold night. On the 4th day, as I happened to meet a Japanese acquaintance who lent me his bicycle so I could finally go home.

As there were no essential utilities available at home, I had to go to a nearby elementary school and a junior high school where there was an evacuation shelter. Even though I already knew that there was little or no food available I stood in line with others hoping to receive anything. Unfortunately, with the shortages the distribution finished before it was my turn. Even though I received nothing, I was cheered by the smiling faces around.

I had lost my phone and was worried about being not able to contact my family. Being worried did nothing to help that I wasn't able to communicate with them. 4 days later I was able to use my friend's phone to contact my family. My family was concerned and asked me to return home because of the radioactivity spreading after Tsunami. I did not want to return home and decided to stay. It has been nearly 2 years since I came to Japan and I can only think of all the teachers and my friends who have helped me. I am saddened at the thought of leaving them in this situation without staying to help. I have decided to stay in Japan after the disaster and will do my best to help restore order and return everyday life to the same as before the earthquake working alongside the Japanese, my friends and teachers.

My First Tremendous Earthquake

Villamil Lopez Domingo Edgar（Mexico）

I am a student at the Sendai International School of Japanese. I am a Mexican. This year the greatest earthquake took place in Japanese history. I was very scared. I was in the school at 14:46 on March 11th. I heard something shaking. My class heard something trembling. Immediately the tremendous earthquake started.

Everyone quickly hid under their desk. Women began crying. We held each other. The earthquake did not stop. All of us were very worried. Our teachers ordered us to quickly get out. We started running down the stairs.

I was very surprised outside. There were a lot of people. Everyone used their mobile phones. I thought of my family and friends. We stayed in a park for about an hour, waiting for further instruction. Afterwards, our principal said "You are going home now. Please pay attention to for further earthquakes."

I went home with Victor, who lives with me. It snowed a lot around 4 o'clock. I was stunned. On my way back, I saw a lot of cars abandoned. A lot of people were forced to walk long distances. Everyone appeared to be anxious. I thought "What would you like to do now? Would you like me to help you with something?"

When I went home, I was very sad. A lot of things were broken. I found that my room messy. The biggest issue was the children in the La Salle Home. We had to ensure their safety.

It was impossible to use any communication networks. Having no electricity, we were not able to talk on mobiles. As the traffic was busy, it was chaos.

Sendai looked miserable at night. With no electricity, we lit candles. I heard

ambulance siren continually. There were a lot of helicopters flying around. Earthquakes took place every 20 minutes. I wanted to rest but it was impossible. Early next morning, I bought a lot of food and beverages. There were no public services such as gas, water and electricity available at home. My life became very difficult.

I received a phone call 11:30 this day. It was from a famous Mexican TV company. I was surprised. They said “Can we interview you now?”. I answered “Yes, no problem”. Then, the interview started. I was not at all nervous. Although the people of Mexico worried about us in Japan, I wanted to share good news. I wanted the people of Mexico not to worry too much.

That night I could access the Internet with my mobile. “Wonderful! Great!” I could listen to my interview on the web. I received a lot of emails. As everyone worried about me, they wrote a lot of comments. Their comments come from the hearts. I was delighted very much. Of course my family contacted me. So, I thanked God. As I was fine, I did not need anything special. Although I cannot forget that night, I could learn a lot things and teachings.

It was a terrible experience but I was impressed by the Japanese. Truly, the Japanese people came together well. They are still making great efforts. Japan is working like a team.

When I was a child, I loved Japanese culture. Now I would like to express my respect to Japan. To express my respect, as I am not good at the Japanese language I work in other ways. Therefore, I’m now doing volunteer work. I worked in a varieties of fields. I cleaned, gave food and beverage. I went to some places such as Ishinomaki, Shiogama and Iwanuma.

I want to say on TV “You are not alone. Let’s work all together. Japan is a

team”.　I pray for Japan.

What We Can Do Now

Toshihiko, SETO（Japan）
Full-time instructor at the Sendai International School of Japanese

At 14:46 on March 11th, preparing for my next lesson in the staff room, I felt a tremendous quake and immediately left my desk. Shortly after, a whiteboard fell down onto where I was sitting while textbooks fell from the shelves one by one. There were tens of students and several instructors crouching in the corridor. Miyagi prefecture is the region which was expected to more than likely to be hit by a large earthquake in the near future, so at once I realized it finally had happened. The quake was so strong that for some reason I could not help laughing. Moreover, the quake lasted a very long time. When the lights went off in the corridor and a small orange emergency light came on, I prepared myself for uncertainty. Although news report said the earthquake measured a lower 6 on the Japanese intensity scale in Aoba-ward, Sendai where the Sendai International School of Japanese is located, I believe that the quake was far worse and intense we felt in our school, which is on the 7th floor of the building.

After the main quake stopped, we evacuated our students to the park in front of our school. Not being able to communicate on our mobiles, we had no information at all. However, as we were prepared for the worst possible scenario we may encounter, we ran to a nearby convenience store and bought some food.

There were a lot of people in the shop with the lights off. The shop had already run out of lunch boxes, rice balls and bread. However, there were still some confectionaries and bottled water left. A clerk had only a calculator to check out and it made the work harder. When we distributed the confectionaries and drinks

back in the park, some students did not understood that the provisions were meant to last and should be rationed and mistakenly finished them.

About an hour later, there were still aftershocks which were grate enough to sway roadside trees. However, our principal told the students to head home and return at 9 am on Monday, 14th. I usually take a train to go to work, but I had to walk back this day. It was snowing. In the city, traffic lights were off and the windows from all the buildings had shattered and the broken glass was everywhere. The pavement had cracked and heaved from the quake and caused fissures and ridges in the road. After I walked about an hour, I saw a TV station which had light. As I entered, I saw a TV in the lobby and it was airing shots of the sea. With a close look I figured out where it was, the screen had "Live at Sendai Airport" in the upper left. It took a while to understand what it meant. There were graphics and maps showing the all of the islands of Japan fringed with red and yellow signifying a warning about a massive Tsunami. I finally understood the magnitude of the situation. It easily exceeded the worst possible scenarios that we thought of when we evacuated to the park. I walked another hour in shock arriving home in the dark. Inside my house, there was no place to step the floor was covered in rubble. I entered into my room carefully with my shoes on, only having the light of my mobile phone. I quickly realized that it was impossible to live there.

The elementary school became an evacuation center and filled with a lot of people. However, I luckily managed to find some space for myself near the door of the library room. The noise of the sliding door behind me made a rattling noise that was similar to the sound of rumbling before earthquakes began and I was scared every time someone used the door to see whether their family and friends were safe. The radio updated us with reports of the damage in the coastal area. Having no

images, I was scared by the phrases such as “the number of dead and missing is many” “we have not obtained the full scale of the earthquake devastation”. Only having my business suit on without any warm cloths, I trembled with coldness and fear and ended up not sleeping almost all night. A half of banana and a handful of snacks were the only food which was distributed the next morning. However, I was extremely grateful for that, moreover I had to be in line for 2 hours in order to charge my mobile for 10 minutes; I could not reach my family and friends in Ishinomaki. In the end I stayed in this evacuation center for 3 days.

On Monday 14th, I headed by bike for the park in front of my school where we promised to see each other again. There were more students than I expected. It was difficult even for us Japanese. So, I cannot imagine how hard and tough it was for them as international students. I still remember that I found them compassionate and resilient as they concerned for me. Luckily, we were able to find out the situation of all but a few students.

On Tuesday 15th, as one of the students appeared to be in Ishinomaki and I could not contact my family, another teacher and I drove to Isninomaki. Being located in the coastal area of Miyagi prefecture, the media was reporting “devastating casualty” at that time. Even though 5 days had already passed, not all the water had receded from Ishinomaki. So, it was difficult to drive. We had to park our car in a convenience store parking lot from which the sea water had already receded. We started to walk towards my parents’ house, where we hoped to gain information. The first floor had been damaged by the tsunami but passable. I found my family there. My father told me where the evacuation centers were and also the flooded areas so that we headed for the town where the student may be by bicycle. The smell in the air was a mixture of sea water and oil. The air was full

of the sound of sirens and helicopters. I will never forget these sounds, smells and the view of total destruction of my hometown. Finally, we almost reached the area of town the student may be in. However, the sea water and mud prevented us going any further and we had to give up.

On Wednesday 16th, one of the missing students popped into our school. We also found out the condition of others and that of a student in Ishinomaki. It took 6 days after the earthquake to make sure all members of the Sendai International School of Japanese were all right.

After the 14th, a lot of students left Sendai. It was understandable as nearly all infrastructure stopped working and we could buy just enough food at that time. Remaining were 20-30 students including those graduating in March. The graduating ceremony had been cancelled due to the earthquake but we decided to conduct a ceremony anyway, even though it was different than usual. With laughter and tears, the ceremony was moving although it was held in a small class room with few in attendance. I believe everyone there for the briefest of times forgot the devastation and difficulties of the disaster.

More than half a year has passed since then and we have managed to support to our students since the earthquake, with a small graduation ceremony and with fewer students since classes restarted in April and we are putting information in our school's blog. Looking back the over the last 6 months, we have been making efforts to do what we can do now as a school in a difficult situation. These essays written about experiences of students after the disaster were assembled to express our feelings and struggles. At the same time as our students suffered and endured we staff also were earthquake victims. We strongly believe that returning to life the same as before the earthquake is the best message to send all that we are strong

as a city and school.

As a Japanese language school in the area devastated by the earthquake, we were interviewed many times, especially because our students were involved with volunteer work. On October, 2011, a lot of students returned to our school and began studies. At the same time, a number of students chose to move away and other students who were scheduled to enroll in April cancelled. Additionally, after the earthquake, the number of students who want to enroll in school drastically declined. This situation was out of our hands and there was nothing we could do to change it. However, we continue to support our students as a Japanese language school. Showing the world that we are committed to supporting our students and growing as a school is important to us. We believe that our way forward is to show our hard work to return to a better place is through our students.